調査報告書
令和２年度　研究紀要　別冊

論　考

応援歌「思へば過ぎし」の成立をめぐって

― 元譜は大捷軍歌「海城の逆撃」である ―

2021 年１月

愛媛県立宇和島東高等学校

論　考

応援歌「思へば過ぎし」の成立をめぐって

― 元譜は大捷軍歌「海城の逆撃」である ―

愛媛県立宇和島東高等学校　事務長　藤原　二朗

要　約

本校において卒業生の語り草と言えば､「校内ボートレース大会」とともに､体育祭での集団演技「思へば過ぎし」である。九番まである歌詞には「会稽の戦、会稽の恥を雪ぐ」や「越王勾践、臥薪嘗胆」などの人口に膾炙する故事成語がちりばめられている。

「思へば過ぎし」は、本校ボート部の応援歌であり、作詞をしたのが三校対抗ボートレース大会の選手であった本田正一であり、曲については、旧制第一高等学校の寮歌「思へば遠し神の御代」を借譜したと考えられてきた。

本論は、「思へば過ぎし」の成立をめぐる調査、とりわけ、その元譜を明らかにしようとする探究の記録であり､元譜は大捷軍歌「海城の逆撃」であることを提唱する立ち位置からの論考であり､また、三校対抗ボートレース大会出場に至る経緯を、120 年後の今日、初めて明らかにするものである。

キーワード : 応援歌「思へば過ぎし」、一高寮歌、三校対抗ボートレース大会、元譜、定説

目　　次

1　はじめに
⑴　宇中創設
⑵　三校対抗ボートレース大会
⑶　応援歌「思へば過ぎし」
2　定説での「思へば過ぎし」の由来
⑴　大会決定について
⑵　選手決定について
⑶　夏休み中の練習について
⑷　詞の創作と譜の決定
3　本論での「思へば過ぎし」の由来
⑴　大会決定について
⑵　夏休み中の練習について
⑶　出場決定について
⑷　選手決定について
⑸　三校対抗ボートレース大会
⑹　詞の創作と譜の決定
⑺　元譜の特定
⑻　寮歌の伝播
⑼　寮歌の変化
4　推論
⑴　穂積ファミリーの宇和島逗留
⑵　翻意の理由
⑶　なぜ、長く一高寮歌を借譜したとされたのか
5　おわりに
追記　より理解を深めるために

1　はじめに

本校・ボート部応援歌「思へば過ぎし」は、明治 34(1901) 年の三校の対抗ボートレース大会での敗戦を機に、出場選手であった宇和島中学生徒の本田正一が作詞したもので、そのことは、本校沿革史やボート部沿革史等に詳しく記載されている。

また、その譜（メロディー）の由来については、一高寮歌「思へば遠し神の御代」（以下　一高寮歌）を借譜（替え歌）したとされる説が､定説となっている。しかしながら、借譜に至った詳しい事情は、明らかとなっていない。

本論では､「思へば過ぎし」の元譜は何かを探し求め、「思へば過ぎし」の創作当時の様子を、これまでに公になっている資料を検証することによって明らかにした。さらに、様々な資料を調査した結果、筆者なりに到達した推論を加えている。なお、本論では、後日の検証のため参考とした資料についても、可能な限り記載した。

⑴　宇中創設

まず、宇中の創設期について、簡単に触れておこう。

明治　9年　変則中学南予学校（開校）
(1876)

明治 29 年　愛媛県尋常中学校南予分校（創立）
(1896)　193 名入学

明治 32 年　愛媛県宇和島中学校と改称
(1899)　生徒定員 400 名となる
初代校長　尾田　信直
105 名入学
「和田」「鷹巣」２艘進水

明治 33 年　113 名入学
(1900)　「雪輪」「布引」２艇新造
第１回競漕大会実施

明治 34 年　愛媛県立宇和島中学校となる
(1901)　89 名入学
三校対抗ボートレース大会に参加
「思へば過ぎし」創作

明治 35 年　第二代校長　松村　伝
(1902)　129 名入学
樺崎沖で校内ボートレース大会開催
松山中に勝利

⑵　三校対抗ボートレース大会

「思へば過ぎし」は、これまでにも述べたように明治 34 年 9 月 22 日に開催された西条・松山・宇和島各中学校が参加し、松山市高浜沖で開催されたボートレース大会（三校対抗ボートレース大会）での宇和島中学（以下　宇中）の大敗を契機として誕生した。

明治 34 年 9 月 21 日・22 日・24 日の海南新聞（今日の愛媛新聞の前身）は、大会について詳しく報じている。それによれば、大会は、第３回松山中学校端艇競漕会として催され、野中･松山中校長を大会長とし、役員及び松山中学の出場選手名が掲載されている。

当日、伊予鉄道は、午前８時より臨時列車を増発、往復切符を発売、教職員生徒は半額とするなどし、少なくとも延べ 5,000 人以上の観客があったことや、多方面から寄付が寄せられたこと、本部知事はじめ高等官等の来賓も参観したことなどを、こと細く報じている。

⑶　応援歌「思へば過ぎし」

本校ボート部応援歌である「思へば過ぎし」は、この明治 34(1901) 年 9 月 22 日に開催された三校対抗ボートレース大会での宇中の大敗を機に、選手であった本田正一が作詞したもので、以後、120 年に渡って本校において歌い継がれている。

なお、曲は、旧制第一高等学校の寮歌である「思へば遠し神の御代」を借譜したとされてきた。

２　定説での「思へば過ぎし」の由来

「思へば過ぎし」の由来については、発表された時期はそれぞれ異なるが、当時の様子を記したいくつかの資料（沿革史や冊子等）により､次第に固定化され、定着していったと考えられる。

いくつかの資料とは

A　宍戸記事
練習時にコーチを務めた宍戸忠士が後に新聞に投稿した記事（大正14(1925)年７月８日から10日の南予時事新聞の連載記事）

B　三谷文書
70周年沿革史（昭和41(1966)年発行）巻末の卒業生・三谷良二の思い出の記「思へばすぎし夏の末」

C　渡辺文書
本校教諭・渡辺一正がまとめた小冊子「『思へば過ぎし夏の末』の由来について」（昭和46(1971)年11月ボート部後援会発行）

D『思へば過ぎし』
宇和島中学校端艇部・宇和島東高校漕艇部沿革史（昭和62(1987)年発行）

E『佐田の岬』
宇和島中学端艇部創設110周年記念誌（平成27(2015)年発行）

である。

これらの資料では､「思へば過ぎし」創作時の様子が、克明に記されており、その様子が臨場感を持って伝えられている。一方、創作時から 120 年以上が経過したこともあって、不明な点も多々あるのも否めない。

今回、これらの資料を改めて検証した結果、これらの資料は概ね同様の内容となっているものの、細かな点に差異が見られる。また、明らかに事実誤認と思われる箇所や、推論に過ぎないと思われる箇所も多く存在する。

本論では、これらの資料を比較・検証することに加え、当時の新聞記事、関連する論文、その他の資料により、創作時の状況をこれまでの説に囚われることなく、事実に即し、より鮮明にしていきたい。

※各資料の関連性について

先に紹介した５つの資料は、最も古いものが大正 14(1925) 年の「宍戸記事」であり、最も新しいものが平成 27(2015) 年の『佐田の岬』となる。宍戸記事でも発表時には、「思へば過ぎし」創作時から四半世

紀が経過しているため、記憶を基にした記述に不正確な点があるのは否めない。

三谷文書と渡辺文書は、ほぼ同時期に記述されており、渡辺文書は、三谷文書に加え三谷らからの証言に基づいて、渡辺自身の推論を加筆したものと言える。

昭和 62(1987) 年の『思へば過ぎし』は、初めて宍戸記事や当時の海南新聞の記事を掲載したもので、推論部分は、ほぼないと言っていい。

最も新しい平成 27(2015) 年の『佐田の岬』は、それまでの４つの記事に新たな推論を加えている。

これらの文書の中で、卒業生及び本校関係者に最も広く知られており、最も影響が大きいと言えるのは、渡辺文書であろう。卒業生の多くが語る「思へば過ぎし」の由来は、ほぼ渡辺文書を基にしていると言っても過言でない。三谷文書と渡辺文書は、本校における定説とされてきた。

ここでは、渡辺文書で「思へば過ぎし」の由来について、それぞれの項目ごとに簡単に見ておこう。

⑴　大会決定について

渡辺文書では、渡辺の推測として、

> たまたま明治 34 年一学期末の松山における三中学校長会議の席上でおそらく松山中学の野中校長（中略）が、「三校間の親睦を図るために、ボートレースを高浜沖で開催してはいかが。」と提案されたが、（中略）しかし、その席上ではこれも“雲か山かはた雪か”で、単に漠然とした抽象的のいわゆる出し合い話程度のものであった。その後間もなく急速に進展して具体化しその年の 9 月 22 日を期して高浜沖のレースが実施されることとなった。(渡辺文書 p10)

とする一方、「一学期末に対抗レースは決定した」（渡辺文書 p10）とするなど、渡辺文書の中においても揺れが見られる。

どちらにしても、

> 適当な準備と十分な練習の余日もないまま、近く迫った三校の対抗レースに参加せざるを得ない窮地に陥ったのである (渡辺文書 p10)

とし、大会決定から大会まで極短期間であったとされてきた。

⑵　選手決定について

また、

> 選手の選考に入ったころは夏休みのこととて、体力に恵まれた適格者は郡部に帰省中のため、遺憾ながら選手の選考の範囲は宇和島町在住の生徒のみに限られ、にわかに次の各氏を選んだのである。(渡辺文書 p10)

として、大会決定が突如行われ、選手選考となったが、夏休み中のためやむなく学校近隣のものから、選手選考を行なったのが第一の敗因であったとしている。

⑶　夏休み中の練習について

夏休み中に練習が行われたが、

> やむを得ず町内薬研堀に帰省中の宍戸忠士氏の自薦に半ば信頼して、その指導を受けることとなった。(渡辺文書 p11)

とし、これが第二の敗因とする。

渡辺文書では、選手を選考後、練習を行なったこととなる。

⑷　詞の創作と譜の決定

急遽、大会に臨んだ宇中軍であったが、結果は、宇中の大敗であった。その後、本田正一は、「思へば過ぎし」を創作することとなるが、その事情を渡辺文書では、

> 戦いが終わって高浜から松山への汽車の中で、敵松山中学の応援団が、歓喜して高らかに合唱する「あな嬉し、喜ばし、戦い勝ちぬ」の凱歌を聞くにつけても、宇中軍の胸はつまり、ただ悲嘆の涙にくれるばかりであった。（註、宇中軍は松山で一泊し、翌日三津ケ浜港発帰宇したもようである）汽車の中で作歌の熱望にかきたてられた本田正一氏が、船中で構想を練り、帰校後直ちに筆を採って、一気呵成に書き上げたのが、すなわち「思へば過ぎし夏の末」の歌詞であった。曲譜は第一高等学校の寮歌で、「春爛漫の花の色」「緑もぞ濃き柏葉の」「ああ玉杯に花うけて」等とともに、当時全国的に流布した「思へば遠し神の御代、たぐひなきかに咲き出でて、いや年年に栄え行く、芳野の山の山桜」の曲譜をそのまま採って転用したものである。(渡辺文書 p15-16)

としている。

本校では、選手であった本田正一が大敗後の帰路には、詞を構想し、帰校後直ちに詞を創作、曲譜は、一

高寮歌「思へば遠し神の御代」を借譜したとされてきた。

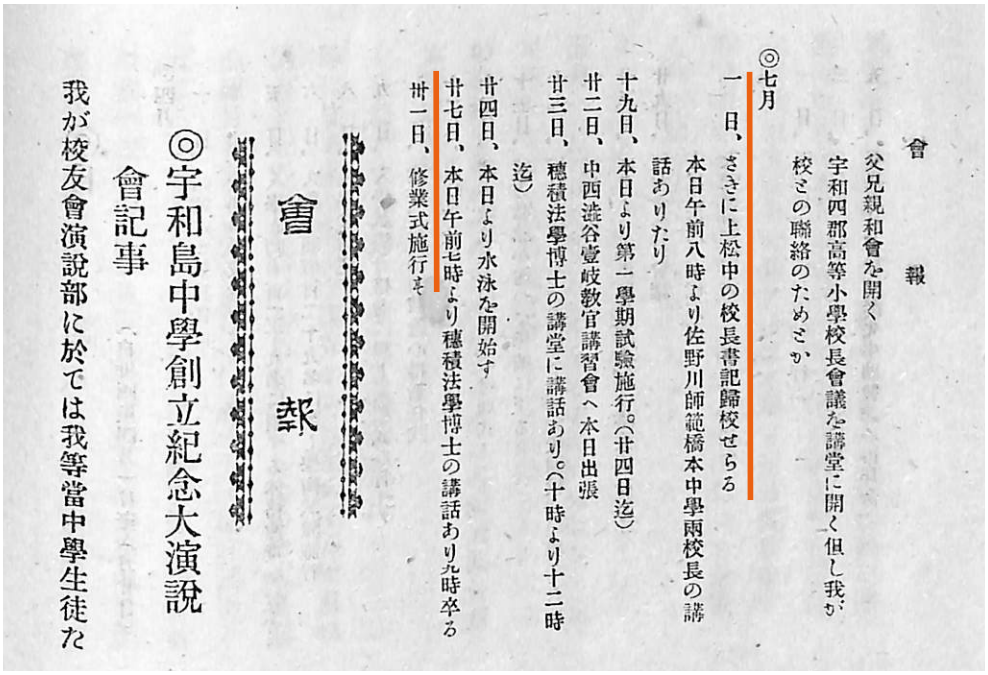
借譜に至った経緯については、渡辺文書も三谷文書も全く触れておらず、詳細は明らかとなっていない。

3　本論での「思へば過ぎし」の由来

本論では、先の項目ごとに、これまでに紹介した５つの資料と本校に残る当時の校友会雑誌、当時の海南新聞（愛媛新聞の前身）の記事、寮歌に関する各種論文、国立国会図書館デジタルコレクションの資料、寮歌に関する刊行物、インターネット上の公開資料他と比較し、検証することで、真実を明らかにしていくこととする。

⑴　大会決定について

まず、大会決定であるが、三谷・渡辺文書では、明治 34 年の一学期末の校長会議で提案があったとするが、本校・『校友会雑誌第９号』に、明治 34 年７月１日尾田校長・書記が松山から帰校、また、同７月 31 日修業式の記載[1]があることから、三中学校長会議は、学期末まで１か月以上前の６月末であったと考えられる。



會報

父兄親和會を開く

宇和四郡高等小學校長會議を講堂に開く但し我が校との聯絡のためとか

◎七月

一日、さきに上松中の校長書記歸校せらる

本日午前八時より佐野川師範橋本中學兩校長の講話ありたり

十九日、本日より第二學期試驗施行。（廿四日迄）

廿二日、中西淺谷壹岐教官講習會へ本日出張

廿三日、穗積法學博士の講堂に講話あり。（十時より十二時迄）

廿四日、本日より水泳を開始す

廿七日、本日午前七時より穗積法學博士の講話あり九時卒る

卅一日、修業式施行せ

會報

◎宇和島中學創立紀念大演說會記事

我が校友會演說部に於ては我等當中學生徒た

資料１　校友会雑誌第９号（明治 34 年９月７日発行）p64

ボートレース大会の開催決定から学期末までには、相当の期間があり、開催決定が開催直近ではなかったことが分かる。大会については、前述したように当時の海南新聞が詳しく報じており、当日は、県知事以下の来賓多数、観客 5,000 名以上、臨時列車が出るなど当時としては一大イベントであり、開催が突如決定されたとは、考えられない。

⑵　夏休み中の練習について

三校対抗ボートレース大会に先立ち、宇和島出身である宍戸忠士をコーチとしボートレースの練習を行っていた。宍戸は、前年の明治 33 年に東京で開設された台湾協会学校に入学し、当時、夏休みのため、宇和島に帰省していた。渡辺文書では、宍戸は、既に台湾協会学校を退学[2]しており、別の進路を模索していたとされる。台湾協会学校は、現在の拓殖大学の前身であり、のちに総理大臣となる桂太郎子爵を初代校長とし、明治 33 年和仏法律学校（法政大学の前身）仮校舎で開校し、翌年、明治 34 年小石川区茗荷谷に新校舎を建設・移転、大正 15 年拓殖大学と改称 している。

コーチを務めた宍戸が、ボートレース大会から 25 年近く経過した大正 14 年７月の南予時事新聞に

> 吾輩が偶々夏期休日に帰郷の際三四年前に本田彝雄君が組織した、健兒団のホトボリの熱が未だ全く冷めず、たださへ、何れへか勃発しやうとする、中学生の英気を誘ひ、自ら餓鬼大将となって、ボートの練習を初めた（南予時事新聞大正 14 年７月８日）

と当時の様子を寄稿している。

宇中ではボートレースが、創立以前の私立明倫館時代から盛んに行われていた[3]ようだが、隆盛だったボート熱も一時は治まっていたようだ。明治 32 年の和田・鷹巣両艇の新造を契機に、再びボート熱が高まったようである。[4]翌年の明治 33 年には、雪輪・布引を進水し第１回端艇競漕会を開催[5]した。宍戸の言う、「ホトボリの熱が未だ全く冷めず」とは、新造や校内ボートレース大会の開催による

1 「７月１日 先に上松中の校長書記帰校せらる」との記載がある。『校友会雑誌第９号』（1901 年、p64）

2 渡辺一正「『思へば過ぎし夏の末』の由来について」（ボート部後援会、1971 年、p11）（以下渡辺文書）

3 宇中第１期生・松本良之助の証言（前掲　渡辺文書、p27）

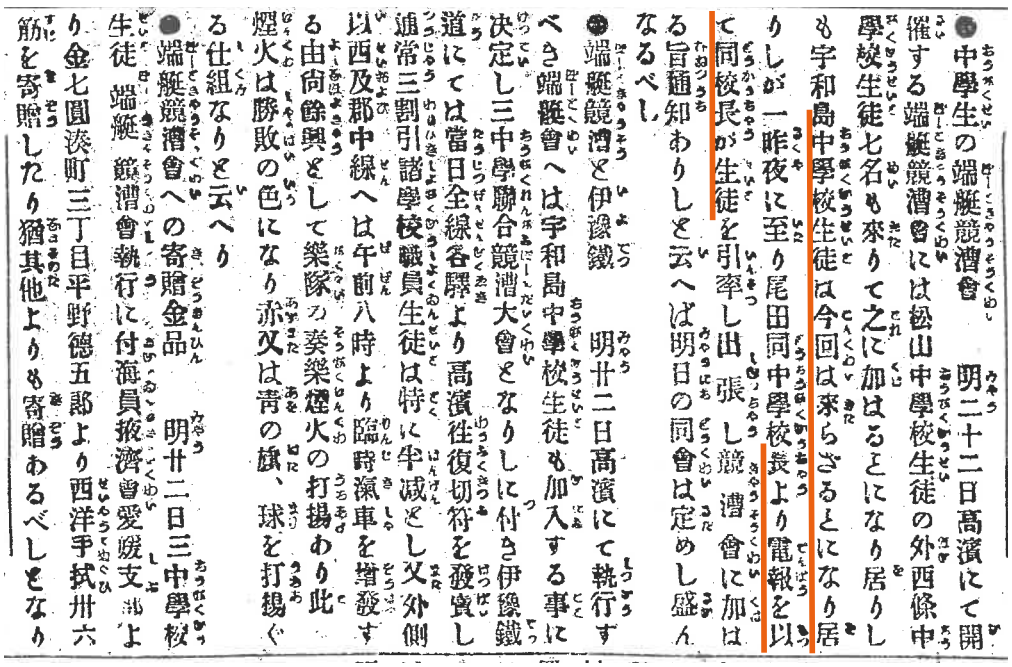
4 『校友会雑誌第２号』（1899 年、p60）

5 『佐田の岬』（2015 年、p26）

ボート熱の高まりを言っているのであろう。　　34年9月21日）

本田彝雄（つねお）は、本田正一の長兄にあたり、本田彝雄が有志を募って、今で言う同好会のようにボート練習を行っており、そのコーチ役を宍戸が買って出たということであろう。

宍戸の記事を読む限り、この練習は、宍戸自身が生徒のエネルギー発散のため企画し、親しかった尾田校長の承諾を得て実施したように思えるが、実際は、尾田校長の思惑は別にあり、元々生徒自身が組織していたボートレース同好会のコーチを委ねたということではないかとも考えられる。



●中學生の端艇競漕會　明二十二日高濱にて開催する端艇競漕會には松山中學校生徒の外西條中學校生徒七名も來りて之に加はることになり居りしも宇和島中學校生徒は今回は來らざることになり居りしが一昨夜に至り尾田同中學校長より電報を以て同校長が生徒を引率し出張し競漕會に加はる旨通知ありしと云へば明日の同會は定めし盛んなるべし

●端艇競漕と伊豫鐵　明廿二日高濱にて執行すべき端艇會へは宇和島中學校生徒も加入する事に決定し三中學聯合競漕大會となりしに付き伊豫鐵道にては當日全線各驛より高濱往復切符を發賣し通常三割引諸學校職員生徒は特に半減とし又外側以西及郡中線へは午前八時より臨時汽車を增發する由尙餘興として樂隊の奏樂煙火の打揚あり此煙火は勝敗の色になり赤又は青の旗、球を打揚ぐる仕組なりと云へり

●端艇競漕會への寄贈金品　明廿二日三中學校生徒端艇競漕會執行に付海員掖濟會愛媛支部より金七圓湊町三丁目平野德五郎より西洋手拭卅六筋を寄贈したり猶其他よりも寄贈あるべしとなり

資料2 明治34年9月21日（大会前日）の海南新聞 宇中から突然の参加通知があったことを伝えている。

⑶　出場決定について

6月末の三中学校長協議において、開催は決定されていた（招待されていた）が、宇中の参加は未定であったと考えるべきであろう。

出場決定に至る状況を詳しく伝えているのが、大会前日の海南新聞である。「中学生の端艇競漕会」と題して、

> 明22日高浜にて開催する端艇競漕会には、松山中学校生徒の外西条中学校生徒7名も来りて之に加わることになり居りしも宇和島中学校生徒は今回は来らざることになり居りしが一昨夜に至り尾田同中学長より電報を以て同校長が生徒を引率し出張し競漕会に加はる旨通知ありしと云へば明日の同会は定めし盛んなるべし（海南新聞　明治

と、出場辞退としていた宇中から、突然、参加の通知があったことを報じている。

もう一度整理しておこう。

6月末の校長協議において、松山中学校長から宇中・西条両中学へ第3回松中校内ボートレース大会への招待があり、宇中は持ち帰り返答することとした。尾田校長は、帰校後、職員会議で協議したが、職員の同意を得ることができなかったため、一度は出場辞退を申し出ていた。

9月11日の2学期始業式後、状況に何らかの変化があり、改めて職員会議で協議したところ、出場への了解を得ることができ、急遽、大会直前の9月19日になって出場する旨電報で通知したということになる。

第1回卒業生である宍戸千顕は、ボートレース大会開催後の明治35年1月発行の『校友会雑誌第10号』に流星子のペンネームで「起て健児」と題して、ボートレース大会前後の様子を寄稿している。[7] これによれば、

> この檄たるや、先に、休暇の末期、吾が校に、投ぜられしに、あわれ、テーチャー、ミーテングに於いて否認の悲運に沈みしに、再び咄嗟、今日に及んで噤まれたる口唇は開かれて、先きの九人は上松すべき命を受けしなりとかや。逡巡躊躇のあげく、突如決められたる九人の漕手は、白沙青松

6 「南予時事新聞」（1925（大正14）年7月8日）

7 『校友会雑誌第10号』（1902年、p10-12）

相映じ、蒼波涼々、よせては返し、かへしては、打ち寄せる高濱のあたり、九月二二日開かるべきレースに、東を指しぬ。(『校友会雑誌第 10 号』p10)

としている。

先に述べたように開催決定した際は、既に夏休みに入っており、多くの宇中生は、帰省していたため、選手は宇和島町在住生徒から選抜し練習を行なったとされてきたが、大会決定そのものは、6月末であり、宇中出場の決定が大会間際になったと考えるべきだろう。

なぜ､一旦出場を断念しておきながら､新学期になって急遽出場することとしたかであるが、その理由は全く不明である。

三谷・渡辺文書は、生徒側の証言に依拠しており、校長会議の協議内容は、当然ながら、生徒に正確に伝達されたとは考えられない。また、生徒であった三谷良二は、明治 35 年の入学であり、大会が行われた明治 34 年には入学していなかった。三谷文書の明治 34 年の記載は、三谷自身の記憶ではなく、先輩からの伝聞によるところが大きいと考えられる。

渡辺文書は、三谷文書によるところが大きく、海南新聞や校友会雑誌などでの事実確認が十分なされていなかったのではないかと思われる。

⑷ 選手決定について

急遽出場を決定したため、出場決定後、選手を選抜するなどの時間的余裕は、全くなく、宍戸忠士と夏休み中に練習を行っていた中から 7 名を選手とし派遣したということになる。

宍戸がコーチを務めた練習に参加した生徒と大会に選手として参加した生徒は、ほぼ一致しており、宍戸が大会出場生徒を選抜したとは考えられない。

つまり、練習参加者は、宍戸の記事によれば、三好重良、鹿村建男、本田正一、高畑欣之助、岩村竹男、井上新、三好学　他と記している。一方、三谷文書・渡辺文書他によれば、参加選手は三好重良、鹿村建男、本田正一、高畑欣之助、岩村竹男、井上新、三善好　とされており、異なっているのは三好学・三善好のみである。三好学（宍戸記事）と三善好（三谷・渡辺文書他）は、共に宇中の卒業者名簿にはなく、どちらか或いは両方の記載誤りか、在籍はしたが何らかの理由で卒業しなかったのか不明である[8]。(三谷文書において、三善好（裡町 1）については、「七本槍」の一人として、愛敬されていたとの記述がある。)

8 『佐田の岬』(2015 年) では、「三善好（不明)」とされている。

当時の松山中学の校友会誌である保恵會雑誌第 77 号[9] によれば、宇中の選手は、三好重良、鹿村建男、本田正一、高畑欣之助、岩村竹男、井上新、三善好とされており、三谷・渡辺文書のとおりであり、宍戸記事は誤りでないかと思われるが、三谷自身が渡辺文書の序文において、保恵會雑誌を参考として選手氏名を記したとしていることから、三谷文書・渡辺文書における選手氏名は、宇中側の記録でなく、松中側の記録によるものであることが分かる。

どちらにしても、練習参加生徒と出場選手は同一だった訳で、練習が開始された際に、宇中出場は決定されていなかったはずで、練習を依頼もしくは承諾した尾田校長は、大会出場をある程度念頭においていたとしても、これまで言われたように大会出場を前提とした練習ではなかったと言える。宍戸は、あくまで部外者であり、生徒同様、三校対抗ボートレース大会の開催決定や出場に至る詳しい経緯について、知る立場になかったと思われる。尾田校長は、大会参加を意識しており、旧知の宍戸にコーチを託したと考えるべきだろう。

したがって、渡辺文書他これまでの本校資料の多くは、ボートレース大会決定時には多くの生徒が帰省しており、出場選手は、急遽、宇和島地域の生徒から選抜したとするが、疑わしい。これまで述べたように、以前から存在した同好の生徒が組織したグループに練習環境を提供し、出場決定後、練習参加者から出場選手を選抜･派遣したと考えるべきであろう。なお、『校友会雑誌第 5 号』(明治 33 年 2 月 25 日発行 p77) に新任理事として海上運動部理事長　三好重良との記載があり、数年前から現在で言うところのボート部のようなものがあったようだ。

校長の出場連絡後、宇中選手は、尾田校長・河野教諭の引率のもと、急遽、松山へ出発したこととなる。このことは、先の流星子の記述と一致すると言える。

⑸ 三校対抗ボートレース大会

いよいよ三校対抗ボートレース大会の当日を迎えることとなったが、派遣生徒は、明治 34 年 3 月（宇中第 1 期）卒業の宍戸千頴によれば､9 名[10] とされるが、7 名の選手に加えて 2 名は誰であったのか不明であるが、明治 34 年 9 月 24 日の海南新聞には、宇和島中学校長・教諭河野福太郎が、「来松・三番町城戸屋に投宿」とある。なお、渡辺文書では、河野福太郎は教

9 竹村自然児「緑洋々（第 3 回競漕会記)」『保恵會雑誌 第 77 号』(1901 年、p126-137)

10 「突如突如決められたる九人の漕手は、(中略) 九月ニニ日開かるべきレースに､東を指しぬ。」とある。前掲『校友会雑誌第 10 号』(p10)

頭とされているが、『校友会雑誌第 10 号』でも河野教諭が引率したとされており渡辺文書の誤りと考えられる。

明治 34 年当時の宇和島から松山への経路は、海路であった。当時の航路は、宇和島から八幡浜などを経由して、大分県別府などへ寄港（明治 44 年まで大分県への寄港は続いた）し、三津浜に到着する航路であった[11]。

大会当日の海南新聞は、

> 来松せし西条中学校生徒７名は、高浜有信館に投宿　宇和島中学校生徒は、昨日午前までは未だ幾人来るや又宿所等も未定なりき (海南新聞 明治 34 年 9 月 22 日)

とし、宇中生徒の到着が遅れていることを報じている。渡辺文書[12]によれば、樺崎港から出港したものの波浪が高く、八幡浜で足止めされ到着が遅れた模様である。

当日のコースは、海南新聞によれば、高浜駅前

> 桟橋を以て審判場となし（中略）桟橋前を以て発漕点とし延齢館下を以て回航点となしその往復一回を競漕距離となす其長さ壱千六百メートル凡そ五分余を以て漕ぎ得る (海南新聞 明治 34 年 9 月 22 日)

と伝えているが、本校の各資料は、往復 800 メートルとしており、実際の当日の記録も５分前後であったこと、当時のボートの能力・地図上で検証した結果等から言っても海南新聞の 1,600 メートルとの記載は誤りであったと考えられる。

なお、渡辺文書他では、

> 現在の駅前桟橋から少し東北よりの海上を起点とし、西南九十九島の方向へ海岸に並行して約四百メートル (渡辺文書 p15)

としているが、海南新聞の言うように、延齢館下の四十島を臨むコースであったと考えられる。

また、三校対抗ボートレース大会と言うものの、松山中学の第３回校内ボートレース大会へ、その年県立中学校となった西条・宇和島の両中学が招待されたというのが、実態であった。

海南新聞によれば、レースは、午前 10 時に開始され、全 17 レースが行われ、各レースごとの記録及び概況を報じている。これによれば、第１レースから第 12 レースは、松山中学校の校内レースであった。

第 13 レースから招待レースとなり、宇中対松中の対抗レースであり、結果は、宇中の大敗であった。海南新聞では「実のなき競漕なりき」と酷評されている。

第 14 レースは、西条と松中の対抗で、こちらは「これ当日第一の見ものなりき」（海南新聞）と評される拮抗レースとなったが、松中が制した。

第 15 レースは、宇中と松中との対抗であったが、再び、松中が制した。

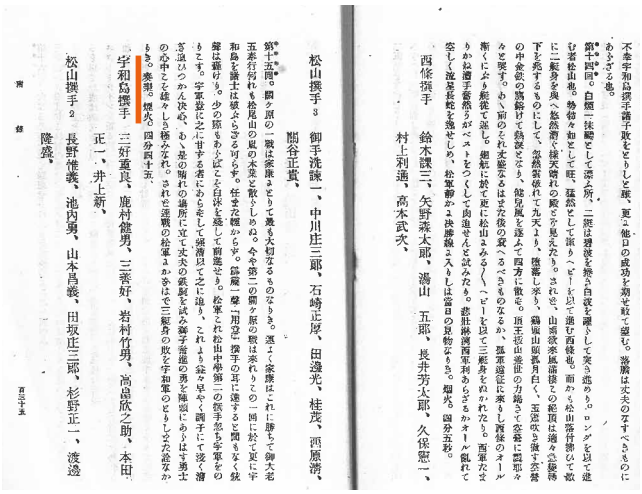
第 16 レースは、再び西条対松中の対戦であったが、再び松中が制した。

第 17 レースは、松中卒業生と宇中・西条中卒業生の対戦となり、松中卒業生が勝利し、午後４時 30 分大会は終了したと伝えている。

松中校内レースについては、選手名簿が掲載されているが、この第13レースから第17レースについては、選手名簿がない。

なお、西条と宇和島の直接対決はなかった。

松中校友会雑誌である「保恵會雑誌第 77 号」は、海南新聞と同様に当日のレースについて詳しく報じており、宇中と西条中の出場選手名も掲載しているが、海南新聞同様に第 17 レースに出場した卒業生氏名は、掲載していない。先に述べたように三谷文書の選手名は、この保恵會雑誌を転載したものである。



資料３　「保恵會雑誌（松山中校友会誌）第 77 号」　大会について詳しく報 じている。

⑹　詞の創作と譜の決定

宇中生にとって、二度の敗戦は屈辱であったばかりか、帰路の高浜からの汽車での、勝者・松中生が歌う凱旋の歌は、宇中生には相当に応えたようだ。

この敗戦を機に選手であった本田正一は、帰路、構想を練り、帰校後間も無く、「思へば過ぎし」を作詞

11「三 内海航路の発達阪神・九州方面との連絡」『愛媛県史 近代 上』（1986 年、https://www.imanabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:2/65/view/8240)

12　前掲 渡辺文書 (p12-13)

したとされる。

ちなみに、「思へば過ぎし」の詞の「チャンピフラグは勝山に　あわれ二度握られぬ」とは、当日の第13レースと第15レースでの敗戦のことである。

これまでは、譜は、第一高等学校の寮歌である「思へば遠し神の御代」を借譜したとするだけで、借譜に至った詳しい事情を記した文書は存在しない。

当時は、詞が重視されており、曲譜については、借譜とすることがしばしば行われていた。初等・中等教育において近代的音楽教育は行われておらず、また、譜面はあったとしても五線譜でなく数字譜が主流であり、譜面を読めるものも限られていた。加えて、作曲できる者も数少なかったという事情があったものと思われる。

さて､本田正一によって作詞された「思へば過ぎし」であったが、一高寮歌・「思へば遠し神の御代」を借譜しようと意図したのは誰であったのか。また、それはいつであったのか。本田正一の作詞後、借譜が決定されたのか、あるいは、借譜を決定後、本田正一が、一高寮歌を念頭に作詞を行なったのか、これらの事情を説明する資料は残されていない。

渡辺文書は、当時の様子を詳しく伝えているが、

> 曲譜は第一高等学校の寮歌で、「春爛漫の花の色」「緑もぞ濃き柏葉の」「ああ玉杯に花うけて」等とともに当時全国的に流布した「思へば遠し神の御代、たぐひなきかに咲き出でて、いや年年に栄えゆく、芳野の山の山桜」の曲譜をそのまま採って転用したものである。(渡辺文書 p15-16)

とするだけで、借譜を決定したのはいつか、誰が借譜を決定したのかなどの詳しい事情は一切記載されていない。(ちなみに「春爛漫の花の色」は明治34年､「緑もぞ濃き柏葉の」は明治36年､「ああ玉杯に花うけて」は、明治35年に創作されており、「当時全国的に流布した」との指摘は当たらない。)

唯一､本校資料では､平成27年発行の『佐田の岬』が、

> ただし、詞が完成して後の曲譜探しの結果ではなかったはずだ。(『佐田の岬』p30)

としているが、何らかの根拠がある訳ではない。

『佐田の岬』では、

> 単純な推測だが､「思へば」で始まる共通の構成（1句七五調の4句」）から作詞段階からこの寮歌を意識していたと思われる。(『佐田の岬』p31)

と推測している。また、夏休みの練習中に「漕艇練習では、思い思いに「思へば遠し神の御代・・・」と放歌高吟して、「暁の夢を驚かして鶴城に反響させ」ていた」とし、ボートレースの練習時コーチを務めた宍戸忠士が、南予時事新聞に大正14年7月8日から10日に連載した記事を引用している。

つまり､『佐田の岬』では、夏休み中の練習期間中、作詞者である本田正一を含む練習参加生徒は、一高寮歌に親しんでいたところから、本田正一は、作詞にあたって一高寮歌を借譜することとし、詞を創作したとする。

なお、宍戸忠士の記事では、

> 当時東京では『思へば遠し』という一高の寮歌が、学生間に流行したので之れを宇和島に輸入して盛んに謡 (南予時事新聞 大正14年7月8日)

ったとしており、当時､「思へば遠し神の御代」が少なくとも宇和島では、一般には、知られていなかったことを窺わせている。

資料4　宍戸忠士の投稿記事(南予時事新聞 大正14年7月8日)「たしか明治34年であったと思う」としており、投稿時には、大会から既に四半世紀が経過していた。

また、当時の寮歌は、私的なものであり、当該学校の生徒以外は、知る術がなかったとの指摘がある。

一高寮歌の寮歌集は、明治37年版が初版であり、それまでは基本的には（ことに譜は）口伝であった。

実は､「思へば過ぎし」もその歌詞が文字化されたのは、創作後かなりの時間を経過したのちであったと

思われる。

作詞後、本田正一自身が文書等に記載した原詞そのものは、残っておらず、投稿等を行った記録もない。(渡辺文書 p29)

渡辺文書によれば、ボートレース大会の翌年である明治 35 年入学の

> 後輩である三谷良二氏が記録され、本田正一氏と同級で、同じ文芸部委員であった四回卒業の芝文雄氏をはじめ二回卒業の豊島輝義、五回卒業の藤井儀夫・入江矩夫、七回卒業の二宮素行の諸氏の検討を受けて発表されたのがこの歌詞であり、原詞である所以である。(渡辺文書　p29)

としている。

その時期は、はっきりとしないが、三谷文書においても、「歌詞は年月久しいことで若干誤伝せられている点もあるが」として、相当な年数、口伝により歌い継がれたと言ってよく、賞賛に値する。

団塊の世代の卒業生の多くが、入学後、屋上で校歌や応援歌の練習をした思い出を語るのは、その名残であったのであろう。

『佐田の岬』では、「思へば過ぎし」と「思へば遠し神の御代」の詞の構成が酷似していることから、「思へば遠し神の御代」を念頭に作詞したとするが、後に述べるが、「思へば遠し神の御代」は、大捷軍歌「海城の逆撃」を借譜しており、「海城の逆撃」と「思へば遠し神の御代」も、詞の構成が酷似している。

本田正一は、「海城の逆撃」と「思へば遠し神の御代」のどちらを念頭において作詞したのかは、詞の構成だけでは断じられない。

次に、元譜とされる一高寮歌「思へば遠し神の御代」について触れておこう。

一高寮歌「思へば遠し神の御代」は、一高寮歌集等では、明治 37 年の第九回紀念祭南寮寮歌とされ、数多い一高寮歌の中でも、未だに人気の高い曲[13]である。

一高寮歌集は、『校友会雑誌第百三十八号号外』(1904 年) として第一高等学校校友会から発行されて以来、平成 16 年 11 月一高同窓会発行まで 17 版が発行されている[14]が、そのどれもが、「思へば遠し神の御代」の元譜は、大捷軍歌「海城の逆撃」としている。ちなみに、「思へば遠し神の御代」の歌詞は、10 番まであり、最後になぜか「君が代」が歌われるとのことである。

大捷軍歌「海城の逆撃」は、明治 28 年発行の大捷軍歌第四編に収録され、作詞は東宮鉄真呂、作曲は奥好義とされている。

軍歌は、軍人が謳歌した軍楽はもちろん、一部の唱歌、戦時歌謡も含むとされ、明治期の軍歌は、唱歌[15]という意味合いもあった。

> 歌詞の形式は、新体詩を採り入れ、音楽形式は唱歌と同一で、主として 2/4 拍子やヨナ抜き長音階、行進曲風の「和洋折衷」という特徴をもつ。[16](李有姫「明治・昭和軍歌にみる近代的特徴：楽曲・テーマ・言語表現を中心に」要旨)

とされる。

一高寮歌については、下道郁子・東京音楽大学准教授の「明治時代の第一高等学校寮歌にみる音楽文化活動」[17]が詳しい。

これによれば、寮歌第 1 号は、端艇部歌「花は桜木、人は武士」であり、明治 23 年の一高対高等商業（現一橋大学）のボートレース大会に際して創作された。

> 寮歌は、歌詞は文書で伝えられたが、基本的に口伝であった。そのため原譜と実際に歌われている旋律や歌詞が異なるということが起き (前掲下道 p38)

> 口伝のため、「新入生の入寮の直後から、上級生による寮歌の伝授が行われた。(前掲下道 p39)

ようである。

> 寮歌は歌われた時代、場所、あるいは一緒に歌った仲間によって、歌われる度に変容すると考えられる (前掲下道 p38)

とされるように、今日の校歌のように譜面などもないため、かなりゆるやかに歌われていたと思われる。

また、「思へば遠し神の御代」は、「海城の逆撃」の借譜であり、2/4 拍子 c 調ヨナ抜き短音階とされている。

---

13 「旧制一高寮歌を歌う会」で「最初に歌う寮歌は（旧制）第一高等学校の第９回記念祭寮歌「思へば遠し」（明治３２年）に決まっている」という
https://blog.goo.ne.jp/motosato8/e/41b67d3befc1d4f1bb86fa3e3363b853

14 「第一高等学校ホームページ」
http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/ICHIKOH/home.html

15 長谷川由美子、綿抜豊昭「明治時代出版軍歌集にみる軍歌の変遷について」『図書館情報メディア研究第７巻１号』(2009 年、p17-25)

16 李 有姫「明治・昭和軍歌にみる近代的特徴：楽曲・テーマ・言語表現を中心に」(http://doi.org/10.18910/61833)

17 下道 郁子「明治時代の第一高等学校寮歌にみる音楽文化活動」『東京音楽大学研究紀要 31』(2007 年、p33-53)

「思へば過ぎし」は、三校対抗ボートレース大会からの帰路、参加選手の本田正一が想を練り、帰校後すぐに作成されたとされることから、詞の創作時期は、ボートレース大会当日である明治 34 年 9 月 22 日からしばらくの間ということになる。

このことからも、詩を創作後、譜を探した(決定した)のではなく、当初から「海城の逆撃」(あるいは一高寮歌「思へば遠し神の御代」)を借譜することを念頭に、作詞したと考えるべきである。

この場合、この三曲は譜が同一であり、詞の構成は当然ながら似通っているため、詞の構成を見ただけでは、借譜にあたってどちらの譜を借譜しようとしたかは、判断できないのである。

⑺ 元譜の特定

つまり、借譜を決定したのは、作詞者である本田正一自身であり、本田正一は、大会当日までに、元譜に親しみ歌唱していなければならない。

先に見たように、「海城の逆撃」は、明治 28 年発行の大捷軍歌に収録されており、明治 34 年までに本田正一が唱歌として歌唱・親しんでいたとしても不思議ではない。

加えて、元譜の認定にあたっては、仮に本田正一が、夏休みの練習中という極短期間に「思へば遠し神の御代」に親しみ、「思へば遠し神の御代」を念頭に「思へば過ぎし」を創作したとしても、「思へば遠し神の御代」は、「海城の逆撃」を元譜としており、「思へば過ぎし」の創作時である明治 34 年当時は、同譜である以上、「思へば過ぎし」の元譜は、「海城の逆撃」であるとすべきである。

歌唱者や作詞者が元譜をどう考えていたかと現実に元譜が何であったかに関連性はない。

ここまで述べて来たように、「思へば過ぎし」の元譜は、大捷軍歌「海城の逆撃」であると明言することができ、これまでの、「思へば過ぎし」の元譜は「思へば遠し神の御代」とする説は、誤りである。

⑻ 寮歌の伝播

次に寮歌の伝播について加えておこう。東京音楽大学の下道郁子は、「寮歌の形成過程と文化的背景：「花は櫻木」から「都ぞ弥生」へ』[18] において、明治 35 年発刊の一高・校友会雑誌第 106[19] 号の「寮歌観」という記事の

> 寮生が元気を鼓舞し、我校風を天下に表白する點に於いて寮歌の功や實に偉大なりという可し。…中略…聞くならく春爛漫の歌は遠く九州の南陸に及べりとか (前掲下道 p31)

との文を指摘し、

> 前年発表の「春爛漫」が九州で歌われているという記述から、寮歌の伝播が始まったことがわかる。(前掲下道 p31)

とし、明治 34 年創作の「春爛漫」が、明治 35 年には九州に伝わったことを指摘している。

当時の中学校・高等学校の教員は、全国から赴任してきており、彼らが寮歌を地方に伝播したことは、十分に考えられることであり、校友会雑誌の指摘は、一部の東京出身の高校生や教師などが進学先や赴任校に寮歌を持ち込んだことを示しているとしても、これをもって、流布していたとまでは言えないのではないか。(まして、渡辺文書の言うように明治 34 年当時に「春爛漫」が全国的に流布していたとする資料はない。)

なお、宍戸忠士の記事は、「思へば遠し神の御代」を宍戸が、東京から「輸入」したとしており、当時、少なくとも宇和島では流布していなかったと考えられ、渡辺文書の「当時全国的に流布した」との説明は誤りである。

⑼ 寮歌の変化

ここで寮歌の変化について触れておこう。寮歌は、軍歌を元譜とすることも多く、曲の構成が同じであった。岸田達也の「寮歌の時代」[20] によれば、多くの曲は、ヨナ（四七）抜き音階でその大部分は、「ピョンコ節」であるとされる。

ヨナ抜き音階とは、日本の伝統的な音楽の音階であり、西洋音階である「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド」の 4 番目のファと 7 番目のシがないところから呼ばれているとのこと。

下道の「明治時代の第一高等学校寮歌にみる音楽文化活動」(東京音楽大学研究紀要 31 巻、2007、p33-52) によれば、寮歌は、当初のヨナ抜き長音階から時代とともにヨナ抜き短音階に変化していった。

明治後期から大正期になり、西洋音楽が一般的になるにつれ、寮歌は変化していき、「思へば遠し神の御代」も変化していった。

先の岸田達也の「寮歌の時代」では、「海城の逆撃」を元譜に「思へば遠し神の御代」となり、「思へば遠

18　下道 郁子「寮歌の形成過程と文化的背景：「花は櫻木」から「都ぞ弥生」へ」『東京音楽大学研究紀要 37 巻』(2013 年、p25-47)

19　今回確認したところ、正しくは、「116 号」であった。

20　岸田達也「寮歌の時代 I」『神陵文庫　紅萌抄 第 11 巻』(1999 年)

し神の御代」が三高寮歌「行春哀歌」に至る過程を説明しており、その間に曲調が変化したことを述べている。

譜は時代と共に変化した。同じ曲であっても、時代とともに変化してきた。

また、穂積重行の『寮歌の時代』(時事通信社 1991)では、「思へば遠し神の御代」は、

> この歌の節は、さきにあげた「海城逆撃の歌」を借りたものと記されているのですが、これがなんと与謝野鉄幹が明治 30 年 8 月に京城で作った有名な「人を恋ふるの歌」の曲と同じなのです。(『寮歌の時代』p37-38)

と多くの人が耳にする曲に借譜されるようになったことを述べている。

とは言え、明治 34 年当時の「海城の逆撃」と「思へば遠し神の御代」、「思へば過ぎし」は、同一譜だったと考えられる。

「海城の逆撃」は、いつの頃からかあまり歌われなくなり、ほとんど変化をしていないと思われる。

一方、「思へば遠し神の御代」は、時代とともに変化していった。

今日、YouTube や各種ホームページなどでこれらの曲を実際に耳にすることができるが、現在の「思へば遠し神の御代」、「思へば過ぎし」、「行春哀歌」、「人を恋ふるの歌」と「海城の逆撃」とは、曲調が異なっており、「海城の逆撃」以外はほぼ同譜と言える。

また、現在の「思へば遠し神の御代」と「思へば過ぎし」は、微妙に異なっており、敢えて言うならば、「思へば過ぎし」は「行春哀歌」とほぼ同一譜であると言える。

この違いがそれぞれの譜が固定化した時代によるとすれば、「思へば過ぎし」の固定化は、「行春哀歌」が完成したとされる大正初期であったと推測する。

4　推論

ここまでで、「思へば過ぎし」創作当時の様子が明らかとなったが、未だ解明されない事項もいくつか残っている。

一つは、当初、出場しないとしたボートレース大会に、突如、なぜ、参加することとしたのか？ということである。

もう一つは、なぜ、本校では十分な根拠のないまま、「思へば過ぎし」の元譜は、「思へば遠し神の御代」であると長らくされてきたか？である。

本論では、これを解明する鍵は、ともに穂積ファミリーの宇和島逗留にあると推測する。そこで、次に、穂積ファミリーの宇和島逗留について述べておきたい。

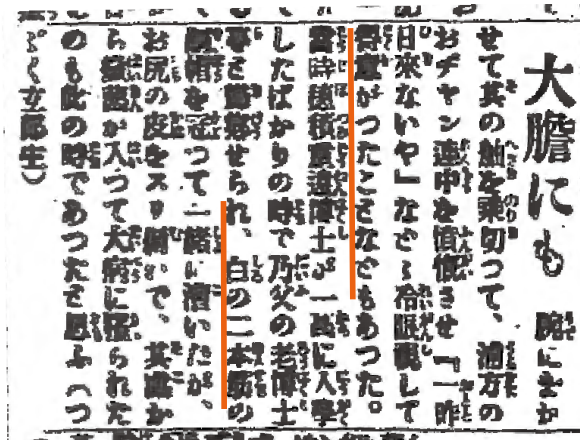
(1)　穂積ファミリーの宇和島逗留

穂積陳重博士は、「思へば過ぎし」が創作された夏、偶然にも墓参のため、長男・重遠、次男・律之介らを伴って、長期間、宇和島に墓参のため帰省していた。

このことは、宍戸の記事にも

> 当時穂積重遠博士が一高に入学したばかりの時で乃父の老博士等と帰郷せられ、白の二本筋の制帽を冠って一緒に漕いだが、お尻の皮をスリ剥いで、其処から黴菌が入って大病に罹られたのも此の時であったと思う (南予時事新聞 大正 14 年 7 月 8 日)

とし、穂積ファミリーの長男である重遠が夏休み中のボート練習に参加していたことを紹介している。


大膽にも

資料 5 宍戸忠士の投稿記事（南予時事新聞大正 14 年 7 月 8 日）

また、穂積陳重の妻である歌子（実業家・渋沢栄一の長女）は、克明な日記をつけており、孫である穂積重行（東京教育大学教授・大東文化大学学長などを歴任）が平成元年に歌子の日記を整理し、『穂積歌子日記』として公刊（『穂積歌子日記 1890-1906 明治一法学者の周辺』1989 みすず書房）している。

『穂積歌子日記』においても、穂積陳重らが当時、宇和島に帰省していたことが詳しく記載されており、宍戸の記事と一致している。

『穂積歌子日記』によれば、穂積ファミリーは、度々、地元の名士やゆかりのある者を逗留先である旅館・居村に招待し、接待している。また、東京にあっても、穂積博士は、宇和島出身者を厚遇し、度々、接待・差

し入れなどを行なっていることが記載されている。

⑵　翻意の理由

先の未解明の疑問については、不明の点も多いが、以下の推論をしたい。

まず、なぜ、当時、宇中には、４隻のボートがあり、一部生徒によるボートの練習も行なわれていたにも関わらず、当初、出場しないとしたかであるが、一部の教員から、ボートの練習を行っていたと言っても同好会の域に留まっており、専門の指導者からの指導などはなく、対抗試合に耐えられないと判断し、出場すべきでないとの意見があったためではないか。

当初、尾田校長としても、それらの反対を押し切ることはできなかったのであろう。

その後、急遽、ボートレース大会出場を決定したのはなぜかであるが、尾田校長を翻意させた最大の理由は、穂積博士の助言であったと推測する。尾田校長が翻意したのは、２学期の始業式が行われた９月 11 日前後だと思われるが、穂積博士は、地元名士を度々招待しており､同じ帝大出身の後輩である尾田校長には、特に目をかけていたことであろう。

在京にあっても、穂積博士は、ボートレース大会の際には重遠以下家族を伴い応援に出かけており、時には選手に差し入れをするなど、ボートレースにも理解があった。

三校対抗ボートレース大会の開催や宇中の参加辞退の話は、当然、穂積博士の耳に入ったであろう。これを聞いた穂積博士は、即座に、尾田校長に翻意を促し、参加を強く助言したはずだ。反対する教員も、郷土の偉人・穂積博士の助言とあっては反対できなかったであろう。尾田校長は、穂積博士の助言を受け入れ、急遽、参加を決定したというのが、本論での推測である。

⑶　なぜ、長く一高寮歌を借譜したとされたのか

もう一つの疑問は、本校では確たる根拠もなく長らく「思へば遠し神の御代」を借譜したとされてきたことである。

その前に、なぜ長らく歌い継がれたかであるが、現在であれば歌集や譜面に基づく歌唱指導を行うことで歌い継ぐことが可能であろう。創作当時は、譜面もなく歌集もなかった。先に見たように創作に先立つ夏休みの練習時には、コーチの宍戸忠士や穂積重遠から一高寮歌の指導があったかも知れない。ただ、あったとしても、歌集などがないなか不完全なものであったと思う。にもかかわらず、練習生が何とか歌唱できたのは、譜が大捷軍歌「海城の逆撃」であり、既に親しんでいたからであろう。

また、一高寮歌を歌唱したのは、夏休みの練習に参加した者だけであり、その他の宇中生は、一高寮歌を知らなかったと思われる。にも関わらず、翌年以降も歌い継がれたのは、歌い慣れた「海城の逆撃」の譜であったからだろう。

であればなおさら、なぜ、一高寮歌を借譜したと長らくされてきたのかであるが、創作当時の宇中生、特に夏休みのボートレース練習に参加した生徒にとっては、穂積ファミリーの逗留は忘れられない出来事だったに違いない。

穂積博士は、既に明治 23 年には貴族院議員に勅選されるなど輝かしい活躍をしており、紛れもない郷土の偉人であった。また、長男・重遠は、一高への入学を控えており、上級学校へ進学を希望した宇中生にとっては憧れの的であったに違いない。ことに作詞者である本田正一は、上級学校への進学を希望していたとされる。また、穂積ファミリーの子供たちには、専用の女中がおり、何不自由のない生活を送っていた。また、多くの書生もおり、父陳重博士や家族らと隅田川で開催されるボートレース大会へも出かけており、学生が競って歌う応援歌である寮歌も耳にしたことであろう。

穂積博士、重遠など子供たち、女中などの話す東京の風俗や在京の中学生の話など、宇中生にとっては、興味が尽きない強烈な思い出となったであろう。

本田正一が「思へば過ぎし」を創作した時に、子供の頃から慣れ親しんだ「海城の逆撃」を想起したのか、夏休みの練習中に重遠や宍戸から聞かされた「思へば遠し神の御代」を想起したのかは分からないが、穂積ファミリーの逗留、子供たちから聞かされた一高など上級学校のこと、東京のボートレースの様子など強烈な印象とともに記憶されたことだろう。

これは、何も本田正一等夏休みの練習に参加したものだけでなく、明治 34 年の夏を穂積ファミリーと過ごした者にとっても同じことであったろう。

「強烈な思い出」が、確たる根拠もないまま、一高寮歌「思へば遠し神の御代」を借譜したという一語に凝縮されたのではないかと推測する。

ただ、時を同じくしなかった者にとっては、当然ながら「強烈な思い出」は共有されず、時とともに忘れ去られたに違いない。

これまでの本校では、「思へば過ぎし」の由来は、三谷・渡辺文書によることが多く、三谷・渡辺文書には、海南新聞や宍戸の記事も引用されておらず、穂積ファミリーの逗留の記述も見えない。加えて､三谷は、創作当時まだ宇中生でもなかった。

三谷・渡辺文書は、生徒の記憶によることが多く、

その記憶も又聞きの類も多かった。どちらにしても、当時の新聞などでの確認が不足していたと言える。

明治 34 年の夏をともに過ごさなかったものにとっては、一高寮歌・「思へば遠し神の御代」を借譜したということだけが、独り歩きして、やがては伝承されていったのではないかと思われるのである。

「夏の末の」の強烈な思い出は、伝えられなかったのではないかというのが本論での推測である。

また、穂積ファミリーの逗留が長く伝えられなかったのは、穂積陳重博士という偉人の人間性にも理由があったのではないか。

穂積ファミリーは、逗留で多額の滞在費を惜しみなく使った。滞在費ばかりか、教育施設・公共施設にたびたび寄付を行なっているが、穂積博士は、そのような多額の寄付を披瀝することがなかったため、記録としてほとんど残っていないと思われる。

これは、「老生は銅像にて仰がるるより、萬人の渡らるる橋になりたし」とのエピソードが示すように、穂積博士の人間性によるものでないか。

「思へば過ぎし」の由来においては、三谷・渡辺文書が依拠した生徒の証言にあっては、当然、ボートレース大会関連の話題が中心となり、長らく伝えられることとなったが、その夏の穂積ファミリーとの強烈な思い出は、時とともに忘れられたのではないか。

5　おわりに

渡辺一正先生は、昭和 46(1971) 年に綿密な調査に基づき、「『思へば過ぎし夏の末』の由来について」をまとめられたが、「しかしながら、書いているうちに数多くの疑問にでくわし、また判断に苦しむ問題点があって（中略）とくに脱稿を直前にしたころは幾多の疑問が生じ」とされ、当時においてさえ、創作時の資料は乏しく、解明できない疑問が多かったようだ。

本論では、県立図書館・国立国会図書館の資料確認他により、渡辺先生の疑問のいくつかは解明できたのではないかと思う。一方、未だ解明できない疑問も多いのも事実である。本論においても、このような疑問が、渡辺先生の「『思へば過ぎし夏の末』の由来について」と同様に「揺れ」となって現れているのは否めない。完全な疑問の解明は、後世においてなされるものと信じる。

本論は、卒業生から「思へば過ぎし」の元譜は何かとの問い合わせを受けたのが調査の端緒である。当初どのような資料を調査すべきか、資料の所在さえ不明な状態であった。本論の調査において検討した資料についても記録しておくべきと考え、調査した内容をできるだけ詳細に記述した。このことにより、簡潔さを欠き、不明瞭となった部分があるのは否めない。もとより、専門家でも研究者でもない筆者の力量不足によるものであり、御容赦頂きたい。

また、本論の作成にあたっては、本校・校友会雑誌などの電子化・pdf 化を行った。この成果により、これらの資料のいくつかを限定公開することとし、追記として紹介しているので御覧頂きたい。

本論は、通常であれば編集者や印刷業者に依頼するべきレイアウトや冊子の体裁なども、すべて筆者が行った。編集は、Adobe InDesign を用い、ネット印刷業者に依頼した。このため、読み辛い点があるとすれば、重ねて御容赦頂きたい。

1 年に及ぶ調査の間、猪原達生様からは、様々な資料の提供、資料の所在・歴史的事実・本校資料などについて、多くの資料とともに懇切な教示を頂いた。改めてお礼を申し上げたい。

（調査・執筆担当：　事務長　藤原二朗）

参考文献

1　穂積歌子 , 穂積重行編 , 穂積歌子日記　明治 23-30 年 , みすず書房 ,1990.

2　穂積重行 , 寮歌の時代 , 時事通信社 ,1991.

3　下道郁子 , 明治時代の第一高等学校寮歌にみる音楽文化活動 , 研究紀要 31,2007, 東京音楽大学リポジトリ http://id.nii.ac.jp/1300/00000853/ .

4　下道郁子 , 寮歌の形成過程と文化的背景 :「花は櫻木」から「都ぞ弥生」へ , 研究紀要 37,2013, 東京音楽大学リポジトリ　http://id.nii.ac.jp/1300/00000905/ .

5　下道郁子 , 大正時代の第一高等学校の寮歌の研究 : 旧制高校の教育と音楽的側面からの検討 , 研究紀要 33, 2009, 東京音楽大学リポジトリ http://id.nii.ac.jp/1300/00000871/ .

6　岸田達也 , 寮歌の時代 ,1999http://www.tbtcf.com/shinryo/c0005/0012.pdf,(閲覧日 : 2020 年 12 月 12 日) .

7　古仲素子 ,1900 年代 -1910 年代における旧制中学校の音楽教育―東京府立第三中学校学友会音楽部の活動に着目して―」,2014,J-STAGE,https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjomer/44/1/44_13/_pdf/-char/ja .

8　安東由則 , 明治期における中学校校友会の創設と発展の概観 , 武庫川女子大学教育研究所研究レポート , 第 39 号 ,2009,https://www.mukogawa-u.ac.jp/~kyoken/report_pdf/39th_02.pdf .

9　手代木俊一 , ＜真白き富士の根＞と讃美歌（1）: 作曲者の誤解と歌詞・曲の変遷 , フェリス女学院大学音楽学部紀要 02,1997, フェリス女学院大学学術機関リポジトリ , https://ferris.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=379&file_id=19&file_no=1 .

10　若井 勲夫 , 旧制高校寮歌の言葉と表現 , 京都産業大学論集 37 ,2007, 京都産業大学学術リポジトリ https://ksu.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=1281 .

11　李有姫 , 明治・昭和軍歌にみる近代的特徴 : 楽曲・テーマ・言語表現を中心に , 大阪大学学術情報庫 ,2017 https://doi.org/10.18910/61833 .

12　長谷川由美子 , 綿抜豊 , 明治時代出版「軍歌集」にみる軍歌の変遷について , 筑波大学図書館情報メディア研究（紀要）第 7 巻 1 号 ,2009,p17-25, https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=repositoryaction_common_download&item_id=18572&item_no=1&attribute_id=17&file_no=1 .

13　第一高等学校寄宿寮編纂 , 向陵誌 ,1913, 国立国会図書館デジタルコレクション , https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1904349 .

14　井上要 , 伊予鉄電思ひ出はなし ,1932, 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1105406 .

15　第一高等学校校友会 , 校友會雑誌第 116 号 ,1902,p54-56 , 国立国会図書館蔵 .

16　真栄城勉 , 青野聡 , 愛媛県における近代学校スポーツの発展過程 (2) : 明治期の松山中学校における運動部の活動 , 琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部 (37),1990,p253-260, http://hdl.handle.net/20.500.12000/1369 .

17　穂積重行 , 比較法学と穂積陳重　– その出発点をめぐって – , 早稲田大学 比較法研究所 ,1986, https://www.waseda.jp/folaw/icl/assets/uploads/2014/05/A04408055-00-021010159.pdf, (閲覧日 : 2020 年 12 月 12 日) .

18　福田秀一 , 穂積重遠の「欧米留学日記」と「独英観劇日記」,2000, 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3011551 .

19　小原宏 , 明治期における郵便局ネットワークの伸展と調整 , 郵政博物館研究紀要 第 8 号 ,2017 . https://www.postalmuseum.jp/publication/research/research_08_02.pdf

20　TAKECHAN のホームページ , 旧制第一高等学校寮歌解説　思へば遠し , http://www5f.biglobe.ne.jp/~takechan/M37P18omoeba.html,(閲覧日 : 2020 年 12 月 12 日).

21　谷 謙二 ,「今昔マップ旧版地形図タイル画像配信・閲覧サービス」の開発．GIS- 理論と応用, 25(1)，1-10,2017 .

22　大村敦志 , 穂積重遠 : 社会教育と社会事業とを両翼として , ミネルヴァ書房 ,2013 .

追記

より理解を深めるために

本論では、これまで本校で紹介されていない、いくつかの資料や事実の発見があった。創作当時の状況をより鮮明にするために、当時の状況とともに紹介しておきたい。

本論において明らかとなった資料

・校友会雑誌

本校には、明治期の校友会雑誌が 10 冊保存されているが、これらは、校史資料館に保存されており、あまり目にすることがなかった。かつて、愛媛県立図書館に依頼し、電子化を行っているが、閲覧のためには資料請求を行う必要がある。今回、すべてを改めて電子化し、関係者に限定公開することとした。

・大会前日、当日の海南新聞の記事

大会を紹介した海南新聞の記事は、大会前日の明治 34 年 9 月 21 日、大会当日の 9 月 22 日、大会後の 9 月 24 日がある。大会後の 9 月 24 日の記事は、『思へば過ぎし』（昭和 62 年）が紹介しているが、本論では、初めて大会前日・大会当日の記事を紹介した。ことに大会前日の記事により、宇中が急遽、出場を決定し電報で連絡したことが明らかとなった。

これまでの本校資料は、このことを承知しておらず、選手選考から大会出場決定に至るまでの事情について様々な推論を行っているが、その多くは、誤っていると言える。

・宍戸忠士の投稿記事

コーチであった宍戸忠士が大正 14 年 7 月 8 日から 10 日の南予時事新聞に連載投稿した記事を、『思へば過ぎし』（昭和 62 年）が抜粋・紹介しているが、穂積重遠が練習に参加した事実は紹介されておらず、本論において初めて紹介した。

当時の宇和島の状況について

当時、宇和島から東京や大阪へはもちろんのこと松山に向かうにも、陸路は整備されておらず、海路が中心であった。大阪から南予地方への航路は、大阪商船と宇和島運輸の 2 社が競合していた。『愛媛県史』[1] によれば、「当時の航路は、宇和島出港の後吉田・八幡浜・川之石を経由して大分県に渡り、佐賀関・大分・別府・日出へ寄港の後瀬戸内海を東行、長浜・三津浜・今治・多度津・高松を経て大阪に至るもので、大阪到着は宇和島出港の翌々日であった。運賃は宇和島・大阪間三等食事付で一円二〇銭であった」とされ、宇和島は東京からは、遠く離れた地域であった。

ただ、明治初期から郵便局など郵便ネットワークは整備されており、郵便・小包・為替・電報などを取り扱っていた。帰省中の穂積博士は、度々、在京の家族に電報を打っていた。

宇中でのボートレースについて

宇中では、創立以前の明倫館時代からボートレースが行なわれていたとされる。「校友会雑誌第２号」に「一時隆盛なりし漕艇練習は久しく規則の廃弛したりしと共に悄々萎縮の姿なりしが。新たに二艘の増艇と厳密なる取締法の発布ありしとによりて。再び菖に復さんとするの勢となれり。然れども吾人は知る。物は新たなる時に於いても最も盛なることを。之を以て。吾人は飽く迄も此の隆盛の永く衰へざらんことを祈る。」とされ、盛衰を繰り返していたことが分かる。

歌子日記にみる宇和島逗留

ここでは、『穂積歌子日記』の記事と本校・校友会雑誌の記事を重ね合わせ、穂積ファミリーの宇和島逗留について簡単に見ておこう。

明治 34 年

7月18日	重遠　一高合格発表
19日	陳重、重遠・律之助・貞三を伴い宇和島へ出発
23日	宇和島着　本町・居村へ逗留 穂積博士　宇中で講演
27日	穂積博士　宇中で二度目の講演
28日	重遠・律之助　鯛漁に出かける
31日	律之助　病気　「出立少しのばす」 （宇中　修業式）
（この間、重遠	ボートレース練習に参加）
8月26日	重遠　尻すりむき　丹毒 以後、一進一退を繰り返す
（9月11日	宇中　始業式　陳重　列席）
12日	重遠　手術
14日	貞三　宇和島発
17日	貞三　帰京
19日	重遠熱も下がり機嫌よし唱歌歌う
22日	三校対抗ボートレース大会 重遠　一高に欠席届提出
10月 1日	歌子　東京を出発　女中てつを伴い
5日	八幡浜　宇和島着
8日	重遠　切開
14日	重遠　ふとんから出る 陳重・律之助　宇和島発
20日	宇和津彦　祭礼
10日	重遠　軽快
11月14日	「重遠快気祝をかね、小高奥山両医始め、親類知己五二三人、居村へ招き饗応したり。旅館の事故、音曲はもて遊ぶこと出来ざりしが、余興いろいろ出ていといとにぎはしく十時頃宴ははてたり。いそがしく委しくしるす暇なし。」
18日	歌子　宇和島発
21日	歌子　帰京
30日	重遠　宇和島発
12月 3日	重遠　帰京

1 「三　内海航路の発達」『愛媛県史　近代　上』（1986 年，https://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:2/65/view/8240）

穂積陳重博士は、宍戸の記事では、「老博士」とされているが、実際にはこの年、46歳であった。穂積陳重博士には、四男・三女があり、重遠は長男、律之助は次男、貞三は三男となる。途中、幼い三男・貞三が帰京していることから、女中・書生など奉公人も同行し、帰省したものと思われる。

重遠の一高の合格発表を確かめた翌日、一家は、妻である歌子や娘たちを東京に残し出発した。博士は、宇和島滞在中毎日のように歌子に電報で様子を知らせており、歌子は克明にそれらを日記に書き留めていた。

当初は、7月中の逗留を予定したようで、7月31日、次男・律之助が体調を崩し、「出立少しのばす」と知らせている。

宇中は、丁度、夏休みとなり、宍戸のボートレース練習が始まった頃であった。

宍戸記事は、長男、重遠もこのボートレースの練習に参加したことを伝えている

8月26日になり、重遠がボートレース練習の際にお尻の皮を擦り剥き[2]、黴菌が入り発熱しているが、これも、宍戸の記事と『穂積歌子日記』の記述は一致している。

以後、重遠の病状は、一進一退を繰り返し、完治したのは11月になってからであった。

宇和島の小高・奥山両医師の治療を受けたが、すぐには軽快せず、別府から外科医を呼ぶなどし、治療を続けた。重遠は、８月末の発病から、11月半ばまで病魔に苦しめられた。当時、東京から宇和島へは、大阪・松山・別府などを経由し、片道３日を要する遠路であった。また、別府から医師を呼び寄せたのは、当時、宇和島からは、松山より別府の方がより近い都会であったからだろう。

重遠は、帰京後、一高に入学。その後、東京帝国大学へ進学し、東大きっての天才と称され、父・陳重と同じく東大法学部長を務め、戦後、最高裁判所判事を歴任し「家族法の父」と呼ばれた大法学者であった。

重遠は、音楽の才にも恵まれており、宇和島滞在から３年後の明治37年に一高寮歌「都の空」(第十四回紀念祭)を作詞している。

母・歌子も子供たちの病気を心配し、女中を伴い宇和島へ来訪し、穂積ファミリーの逗留は、７月半ばから重遠が宇和島を出発する１１月末まで実に４か月以上の長期間に及んだ。

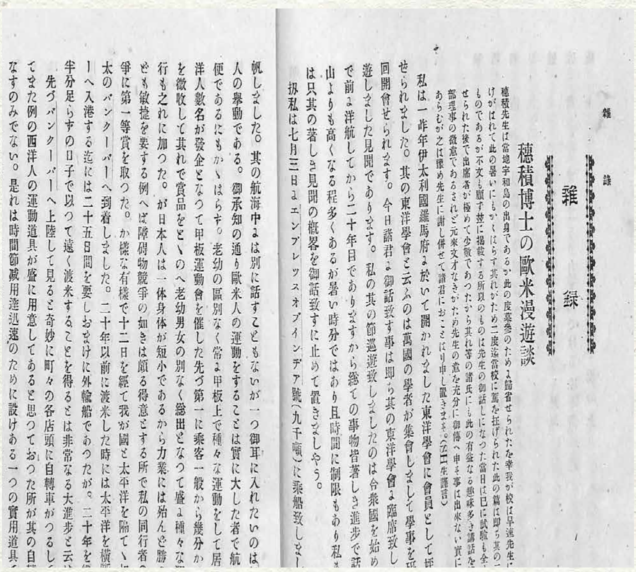
『穂積歌子日記』によれば、旅館・居村の滞在費、今で言うチップの類・子供たちの治療費・度々の地元の有力者・縁者を招いての宴会、地元学校や施設への寄付など、その間の滞在費は、2,950円（当時の穂積陳重博士の１年分の給料に相当し、現在のお金に換算すれば数千万円となる。）という、途方もない金額となっている。

また、穂積博士は、宇和島帰郷後、宇中において２度講演を行っており、校友会雑誌によれば、一度目は帰郷後まもない､明治34年７月23日(10時～12時)、二度目は明治34年７月27日（７時～９時）に行われた。

その講演内容が､「校友会雑誌第９号」(明治34年９月７日発行　p30-37）に､「穂積博士の欧米漫遊談」として掲載されている。

穂積博士は、ローマで開催された国際東洋学会に招かれ、明治32年７月に横浜を発ち、カナダ・アメリカ・イギリスを経てローマに到着、国際東洋学会での発表を終え、パリの万国博覧会を見学後、ドイツ・アメリカを経て､明治33年５月に帰国したことがわかっているが、宇中での講演は、中学生に向けてこの欧米旅行について、各国の様子をわかりやすく語ったもので、120年以上が経過した現在でも非常に興味深い内容となっている。

『穂積歌子日記』によれば、度々、地元の名士やゆかりのある者を逗留先である旅館・居村に招待し、接待している。また、東京にあっても、穂積博士は、宇和島出身者を厚遇し、度々、接待･差し入れなどを行っていることが記載されている。


雑録

雑録

穂積博士の歐米漫遊談

穂積先生は當地宇和島の出身であるが此の度墓参のために歸省せられたを幸我が校は早速先生に
けがはれて此の暑いにもかゝはらす其れがため二度迄當校に駕を枉げられた此の篇は即ち其の一
ものであるが不文も顧ず茲に掲載する所以のものは先生の御話しになつた當日は已に試驗も全
せられた後で出席者が極めて少數であつたから其れ等の諸氏にも此の有益なる趣味多き講話を
部理事の微意であるされど元來文才なきがため先生の意を充分に御傳へ申す事は出來ない實に
あらむが之は豫め先生に謝し併せて諸君におことはり申し置きます。(SH生謹言)

私は一昨年伊太利國羅馬府に於いて開かれました東洋學會に會員として
せられました。其の東洋學會と云ふのは萬國の學者が集會しまして學事を
回開會せられます。今日諸君に御話致す事は即ち其の東洋學會に臨席致し
遊しました見聞であります。私の其の節巡遊致しましたのは合衆國を始め
で前に洋航してから二十年目でありますから總ての事物皆著しき進歩で
山よりも高くなる程多くあるが暑い時分ではあり且時間に制限もあり私
は只其の著しき見聞の概畧を御話致すに止めて置きましやう。

扨私は七月三日にエンプレッスオブインデア號(九千噸)に乘船致しまし
帆しました。其の航海中には別に話すこともないが一つ御耳に入れたいのは
人の擧動である。御承知の通り歐米人の運動をすることは實に大した者で航
便であるにもかゝはらず。老幼の區別なく常に甲板上で種々な運動をして居
洋人數名が發企となつて甲板運動會を催した先づ第一に乘客一般から幾分か
を徴收して其れで賞品をとゝのへ老幼男女の別なく總出となつて盛に種々な
行も之れに加つた。が日本人は一体身体が短小であるから力業には殆んど勝
ども敏捷を要する例へば障碍物競爭の如きは頗る得意とする所で私の同行者の
爭に第一等賞を取つた。か樣な有樣で十二日を經て我が國と太平洋を隔てゝ
太のバンクーバーへ到着しました。二十年以前に渡米した時には太平洋を横
ーへ入港する迄には二十五日間を要しおまけに外輪船であつたが。二十年を
半分足らずの日子で以つて遠く渡米することを得るとは非常なる大進歩と
先づバンクーバーへ上陸して見ると奇妙に町々の各店頭に自轉車がつるし
てまた例の西洋人の運動道具が盛に用意してあると思つておつた所が其の自
なすのみでない。是れは時間節減用達迅速のために設けある一つの實用道具

資料 6『校友会雑誌第９号』(明治34年９月７日発行 p30-37）

2　大村敦志『穂積重遠：社会教育と社会事業とを両翼として』(2013,p16)では、腕を擦りむき高熱を発し、後遺症として腕を一定以上に上げることができなかったとする。

各文書の比較と検証

「思へば過ぎし」の由来は、以下の主要５文書により固定化されたものだと考えるが、各文書で細かな相違がある。

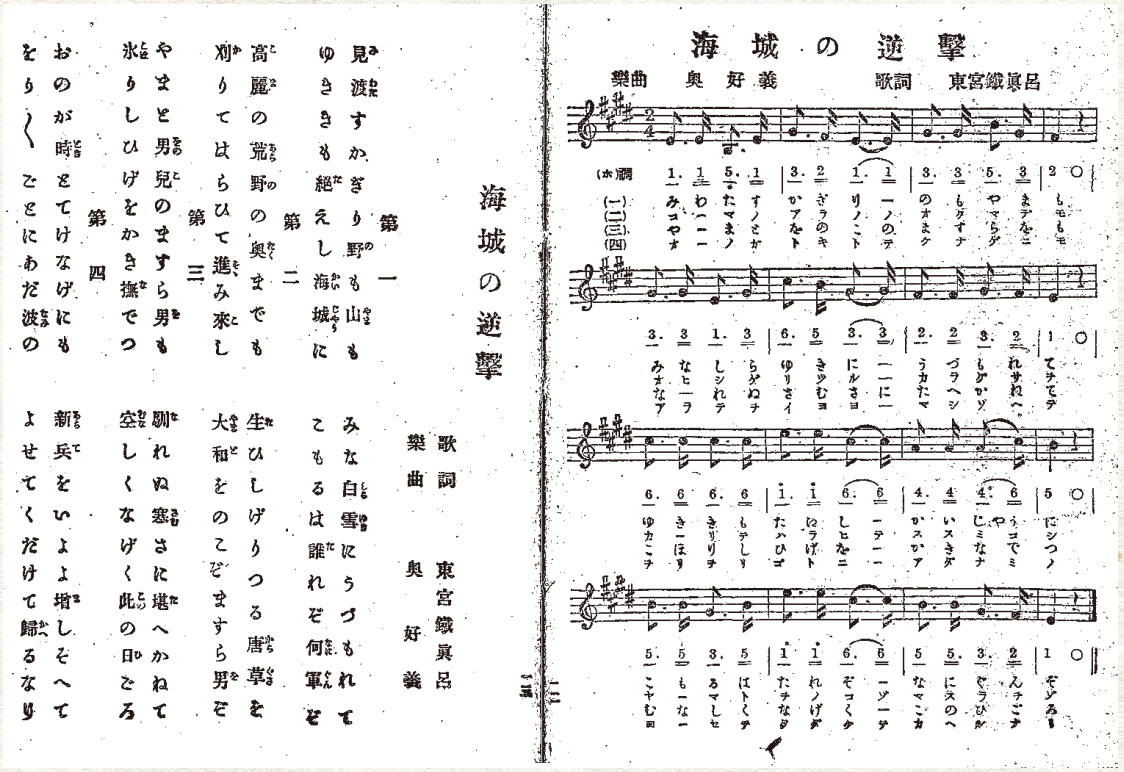
以下に主要な事項について比較した。（括弧内は筆者注記）

宍戸記事 （T14　南予時事新聞）	三谷文書 (S41 70 周年沿革史巻末)	渡辺文書 (S46「思へば過ぎし夏の末」の由来について)	『思へば過ぎし』 (S62　宇和島中学校端艇部・宇和島東高校漕艇部沿革史)	『佐田の岬』 (H27　宇和島中学校端艇部創設 110 周年記念誌)
文書の由来				
コーチを務めた宍戸忠士が、大正１４年７月の南予時事新聞へ掲載した記事（掲載時には、ボートレース大会から既に２５年程が経過している。）	７０周年沿革史巻末の「思い出の記」に明治４２年卒業の三谷良二が掲載。三谷は、ボートレース大会の翌年に入学しており、創作時の様子は、先輩等からの伝聞を基にしている。（掲載時には、ボートレース大会から既に 70 年近くが経過している。）	S46 年ボート部後援会発行。 本校教諭・渡辺一正が宇和島ライオンズクラブでの講演のためまとめたもの。渡辺の文章は、三谷良二の証言に、渡辺自身の推論を加えたもの。三谷も序文を寄せている。事実誤認の箇所も散見される。現在多くの卒業生が語る「思へば過ぎし」の由来は、この文書の影響が最も大きいと言える。（掲載時には、ボートレース大会から７０年程が経過している。）	独自の推論はなく、ボートレース大会当時の海南新聞（愛媛新聞の前身）記事と宍戸記事を転載。（初めて両方記事を一般に紹介したもの。掲載時には、ボートレース大会から８５年程が経過している。）	三谷文書・渡辺文書を基本に再構成したもので独自の推論を加えている。 渡辺文書の事実誤認も一部引き継いでいる。（掲載時には、ボートレース大会から 120 年近くが経過している。）
一高寮歌を転用したことについての記述				
当時東京で「思へば遠し」といふ一高の寮歌が、学生間に流行したので之れを宇和島に輸入して盛んに謡（宍戸が、宇中生に一高寮歌を紹介したとするものの、） 宇中生徒が謡っている「思へば過ぎし夏の末」の悲壮な歌は当時敗辱に泣いた本田正一君が作った記念のものである。 (思へば過ぎしの譜との関連については記述していない。)	曲譜は一高の寮歌「思へば遠し神の御世、たぐひなきかに咲き出でて、いや年々に栄え行く」の曲譜をそのまま借りたるものである。(p9) (借譜したとするが、理由などの詳細の記述はない。)	曲譜は第一高等学校の寮歌で、「春爛漫の花の色」「緑もぞ濃き柏葉の」「ああ玉杯に花うけて」等とともに当時全国的に流布した「思へば遠し神の御代、たぐひなきかに咲き出でて、いや年年に栄えゆく、芳野の山の山桜」の曲譜をそのまま採って転用したものである。(p15-16) (「春爛漫・・」(M34)「緑もぞ・・」(M36)「ああ玉杯・・」(M35) は、「当時」全国的に流布しておらず、誤りと言える。「芳野」は、「吉野」と同義。)	記載なし。	曲譜は第一高等学校第９回紀年祭南寮寮歌(明治 32<1899> 年)、「思へば遠し神の御代、たぐひなきかに咲き出でて、いや年年に栄えゆく、吉野の山のざくら」(原曲「大捷軍歌・海城逆撃」の譜) を転用した。(p30) (渡辺文書を基本に独自の推論を追加したもの。初めて海城の逆撃について記載している。)
校長会議及びボートレース大会の期日決定について				
記載なし。	偶偶３４年１学期の校長会議で三校ボートレースの話が進み、その年９月２２日を期して、高浜沖のレースが実施されることとなった。何様にも学期末の事とて足許から鳥がたつような・・・ (校長会議で実施期日は決定されたとする一方、学期末に急に決定されたとする。なお、校長会議は、６月末。修業式は、７月 31 日であった。（校友会雑誌第９号 p64)	たまたま明治３４年１学期末の松山における三中学校長会議の席上でおそらく松山中学の野中校長（中略）しかし、その席上ではこれも“雲か山かはた雪か”で、単に漠然とした抽象的のいわゆる出し合い話程度のものであった。その後間もなく急速に進展して具体化しその年の９月２２日を期して高浜沖のレースが実施されることとなった。（三谷文書を基本に渡辺の推論を加えたもの。期日決定は、校長会議の後に決定したとするが、三谷の記述と異なり、渡辺の推論ではないか。）	記載なし。	明治３４（１９０１）年１学期末（７月）に松山で３中学校長会議が開かれた。その折、松中校長の野中久徴が（中略）この校長会の後、急速に交渉が進展して、９月２２日に開催することになった。 (渡辺文書を基本に、独自の推論を加えている。三谷文書・渡辺文書・本文書も校友会雑誌第９号の記述を確認しておらず、校長会議が、実際は６月末。修業式は７月 31 日であったことは、認識していなかったと思われる。)

宍戸記事 （T14　南予時事新聞）	三谷文書 （S41 70 周年沿革史巻末）	渡辺文書 （S46「思へば過ぎし夏の末」の由来について）	『思へば過ぎし』 （S62　宇和島中学校端艇部・宇和島東高校漕艇部沿革史）	『佐田の岬』 （H27　宇和島中学校端艇部創設 110 周年記念誌）
三校対抗ボートレース大会についての記述				
遂に其秋一一月松山中学と対抗レースをやったが （松山中学との対抗レースであり、三校対抗レースとは記述していない。）	三校の対抗レースが開催せられる当日の九月廿二日である （三校の対抗レースとしている。松山中学の校内ボートレース大会への記述はない。）	いよいよ三校の対抗レースが開催せられた。 （三谷文書と同じく三校の対抗レースとしている。 「レースは、対抗レースを加えて合計１７回で」としており、渡辺には、松山中学の校内ボートレース大会との認識はあったと思われる。）	「三中学の短艇競漕会概況」と題した海南新聞記事を転載。 （三中学対抗とはしていない。）	松中の校内端艇競漕会に併せて実施された。 （三中学対抗競漕会としつつ、松山中学の校内ボートレース大会であったと記述。 レース内容を把握したうえで、三中学による巴レースとしている。）
各文書の事実誤認と思われる箇所 ボートレース大会の期日（明治 34 年 9 月 22 日）について				
ボートレース大会の実施を「一一月」としている。（9 月の誤り。誤植又は記憶違いか。）	日付の誤りはない。	日付の誤りはない。	日付の誤りはない。	日付の誤りはない。
※ちなみに、本校沿革史（70 周年・80 周年・110 周年）のどれもがボートレース大会を明治 35 年としており、誤っている。				
大会レース長・コース位置（海南新聞には「其往復一回を競漕距離となす其長さ 1,600 メートル凡そ 5 分餘以て漕ぎ得る」とあるが、現在でも困難なタイムであり、記事は誤りであると思われる。往復は、800m であったとも考えれるが真偽は、不明。三谷文書以下が、800m としているのは、海南新聞の記事を確認していなかった証左とも言えるか。コース位置については、海南新聞の記事は、当時の名勝地であった延齢館横の四十島を臨む絶景の場所であり、5,000 名に及ぶ観客を収容するにも最適の場所と思われる。）				
大会当日既に帰京しており、当日の詳細については、記述なし。	海岸に並行して 4 百米、そこで回航の往復 800 米。（なぜ 800m としたか、根拠不明。コース位置について記載なし。）	コースは現在の駅前桟橋から少し東北よりの海上を起点として、西南九十九島の方向へ海岸に平行して約 400 メートル、そこで回航して折り返し、再び起点に向かって約 400 メートル、往復約 800 メートルであった。（三谷文書のとおり。コース位置は、誤っていると思われる。延齢館の存在や当時の高浜駅の位置を承知していなかったと思われる。）	松山高浜沖・折り返し 800m。 （詳細の記述なし。）	海岸に並行して 400 メートル（中略）往復約 800m であった。（渡辺記事を引用か。）
その他の事実誤認と思われる箇所				
		「松山中学の野中校長（元裁判所判事で政治家肌の人物であったらしい）」としている。 （野中久徴は、松山藩米国留学生で岩手県警察部長から宇都宮地裁検事正を経て、松山中学校長となった。判事の経験は確認できない。）		野中久徴は、維新期松山藩の少参事などを務め岩手県の警務部長や島根県松江裁判所の検事正など歴任して （調査に基づき加筆したと思われる。）
根拠としたと思われるもの				
ほぼ本人の記憶によるものと思われる。	先輩等からの伝聞及び保恵會雑誌を引用。	三谷文書・三谷等からの聞き取りなど。	三谷・渡辺文書、海南新聞、南予時事新聞など。	三谷・渡辺文書、『思へば過ぎし』(S62) に独自調査を加えている。

○三曲（海城の逆撃・思へば遠し神の御代・思へば過ぎし）の曲譜の比較

海城の逆撃（大捷軍歌第４編）



海城の逆撃

歌詞　東宮鐵眞呂
樂曲　奥好義

第一
見渡すかぎり野も山も
ゆきも絶えし海城に
みな白雪にうづもれて
こもるは誰れぞ何軍ぞ

第二
高麗の荒野の奥までも
刈りてはらひて進み來し
生ひしげりつる唐草を
大和をのこぞますら男ぞ

第三
やまと男兒のますら男も
氷りしひげをかき撫でつ
剛れぬ寒さに堪へかねて
空しくなげく此の日ごろ

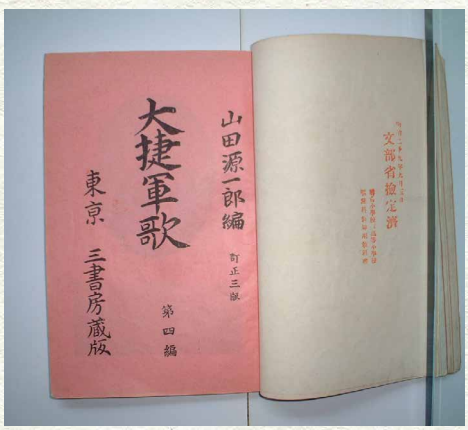
第四
おのが時とてけなげにも
新兵をいよいよ增しそへて
よせてくだけて歸るなり
ここにあだ波のをゝ〳〵

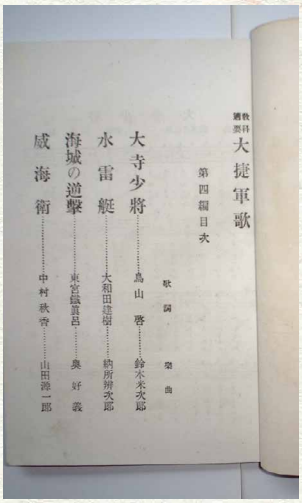
海城の逆撃

樂曲　奥好義　　歌詞　東宮鐵眞呂

資料 7「数字譜」も掲載されている。
M YASUDA のブログ　https://21432839.at.webry.info/201411/article_7.html から引用

「文部省検定済」「教科摘要」の文字が見える。唱歌でもあったことが分かる。





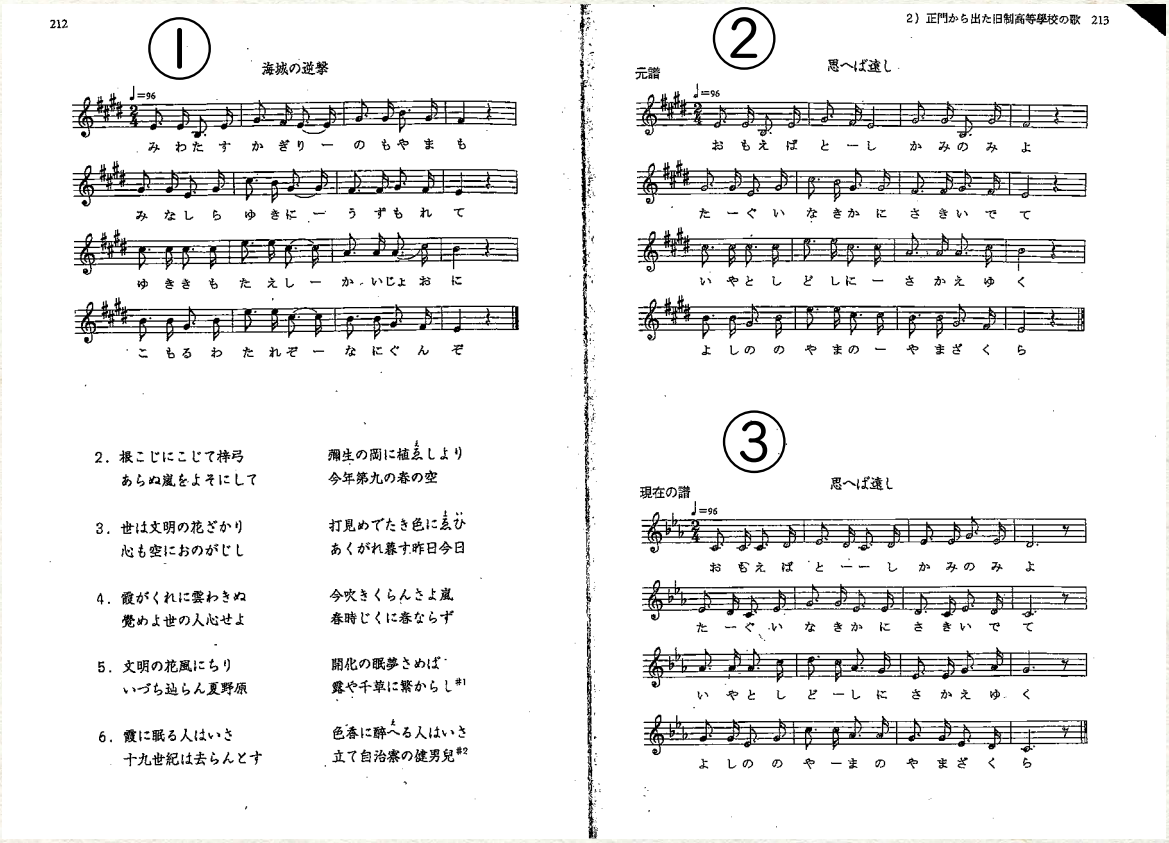
資料８、９、10　画像は、国文学研究資料館 近代書誌・近代画像データベースから
http://dbrec.nijl.ac.jp/BADB_YUTK-00790

◯譜の変遷

曲譜は、時代とともに変化した。

当初、「思へば遠し神の御代」②と「海城の逆撃」①は、同譜だったが、③に変化していった。

同様に、「思へば過ぎし」も①の譜であったが、③に変化していった。



資料 11　全国旧制高等学校寮歌名曲選 Part2 2017 春秋社

譜の変遷については、「旧制第一高等学校寮歌解説 http://www5f.biglobe.ne.jp/~takechan/M37P18omoeba.html 」が詳しいので引用する。

「大捷軍歌・海城の逆撃」の譜（ホ長調・４分の２拍子）

原譜はホ長調・４分の２拍子であったが、昭和１０年寮歌集で、基本的に譜をそのままにして、調号を♭×３に置き換える

ことでハ短調に移調した。例外的に譜を変え移調した箇所は次のとおりである。譜はホ長調読み。

1、「をもえば」（１段１小節）の「へば」ド-レ

2、「とーし」（１段２小節）の「し」ド-レ

3、「たーぐひ」（２段１小節）の「－」レ

4、「なきかに」（２段２小節）の「な」ソ-

5、「いやとしどしにー」（３だん１・２小節）の「しど」ド レ- 同「－」ソ

6、「さかへ」（３段３小節）ミ-ソソ-

7、その他 ４箇所にスラーが付いたが、すべて平成１６年寮歌集で除かれた。

平成１６年寮歌集で、３箇所が次のとおり変更になった。譜はハ短調読み。

1、「さきいでて」（２段３小節）の「き」ラ

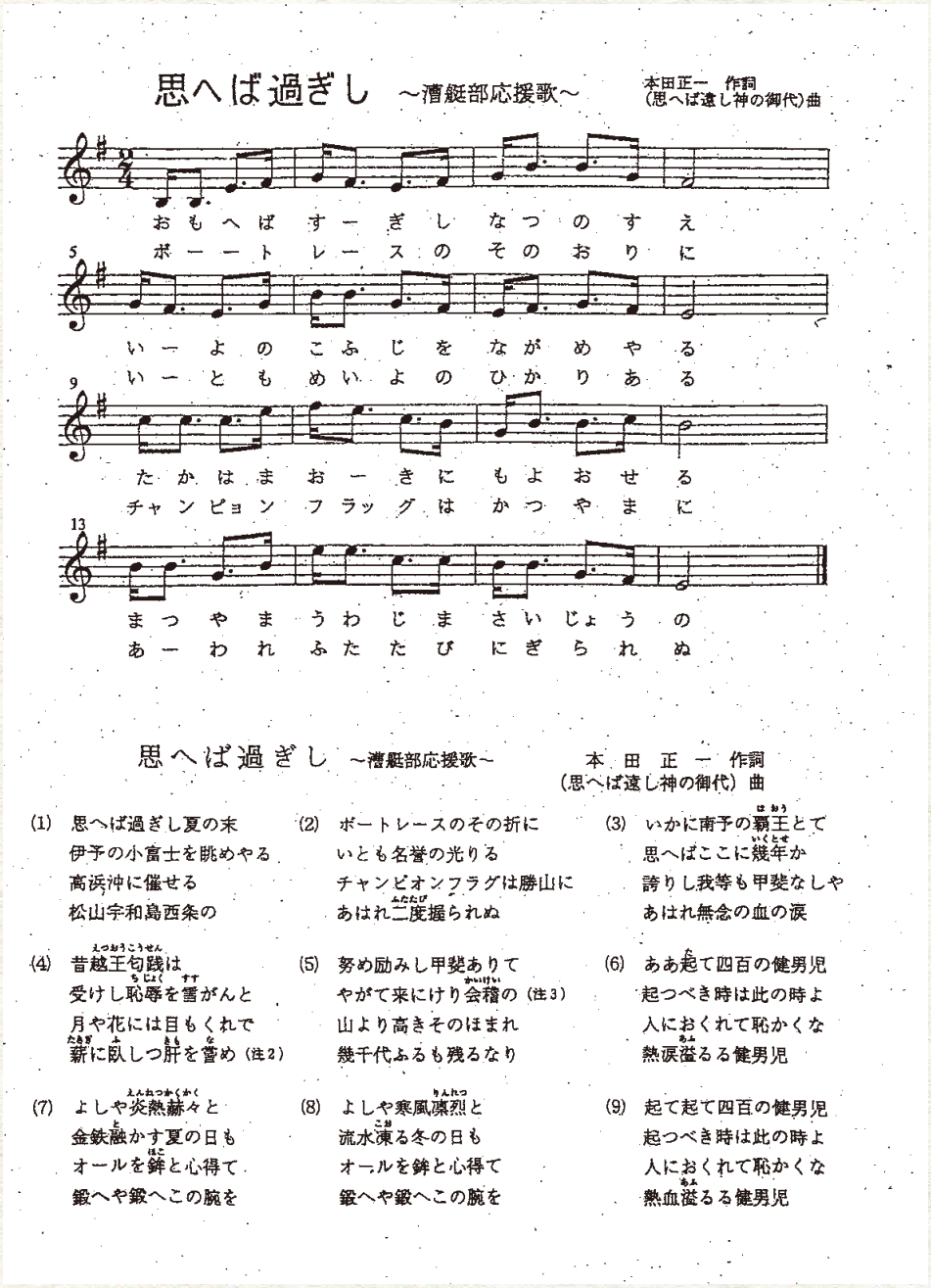
2、「いやと」（３段１小節）ミ-ミミ-

3、「さかへゆく」（３段３小節）の「か」ド

このように譜が変わり短調化しても、この歌の軍歌たる起床ラッパの役割は終わることなく、ストームで「立て自治寮の健男兒 立て自治寮の健男兒」と大声で歌われた。

○「思へば過ぎし」現在、本校で利用されている歌譜

「海城の逆撃」①と当初同譜であった。その後、③のように変化していったと思われるが、全く同譜という訳ではない。



思へば過ぎし　～漕艇部応援歌～　　本田正一 作詞
(思へば遠し神の御代)曲

おもへばすーぎしなつのすえ
ボーートレースのそのおりに
いーよのこふじをながめやる
いーともめいよのひかりある
たかはまおーきにもよおせる
チャンピョンフラッグはかつやまに
まつやまうわじまさいじょうの
あーわれふたたびにぎられぬ

思へば過ぎし　～漕艇部応援歌～　　本田正一 作詞
(思へば遠し神の御代) 曲

(1) 思へば過ぎし夏の末
伊予の小富士を眺めやる
高浜沖に催せる
松山宇和島西条の

(2) ボートレースのその折に
いとも名誉の光りる
チャンピオンフラグは勝山に
あはれ二度握られぬ

(3) いかに南予の覇王とて
思へばここに幾年か
誇りし我等も甲斐なしや
あはれ無念の血の涙

(4) 昔越王句践は
受けし恥辱を雪がんと
月や花には目もくれで
薪に臥しつ肝を嘗め (注2)

(5) 努め励みし甲斐ありて
やがて来にけり会稽の (注3)
山より高きそのほまれ
幾千代ふるも残るなり

(6) ああ起て四百の健男児
起つべき時は此の時よ
人におくれて恥かくな
熱涙溢るる健男児

(7) よしや炎熱赫々と
金鉄融かす夏の日も
オールを鉾と心得て
鍛へや鍛へこの腕を

(8) よしや寒風凛烈と
流水凍る冬の日も
オールを鉾と心得て
鍛へや鍛へこの腕を

(9) 起て起て四百の健男児
起つべき時は此の時よ
人におくれて恥かくな
熱血溢るる健男児

資料 12　現在の歌譜

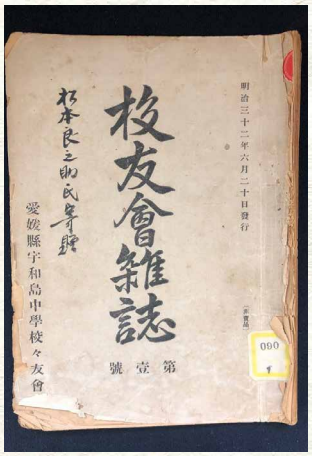
歌詞には故事成語がちりばめられている。『佐田の岬』(2015) では「ちまたでは、日清戦争後の三国干渉以後、宿敵ロシアへの復讐心から頻繁に「臥薪嘗胆」が叫ばれていた。中国春秋時代の呉越抗争から生まれたこの故事は、当時の中学生には周知のことだった。」としている。ちなみに日清戦争は、1894(明治 27) 年に開戦、同年 11 月旅順が陥落、12 月海城が陥落したが、その奪還を目指して清国軍がたびたび攻撃を繰り返し、日本軍との激しい戦闘が翌年まで続いた。三国干渉は、終戦後の 1895(明治 28) 年であった。本田正一が「海城の逆撃」の譜を選択したのは、自然な流れだったと言えるか。

本校教諭・渡辺一正がまとめた小冊子「『思へば過ぎし夏の末』の由来について」（昭和 46(1971) 年 ボート部後援会発行）
本校で語られる「思へば過ぎし」の由来は、この冊子によるところが大きい。

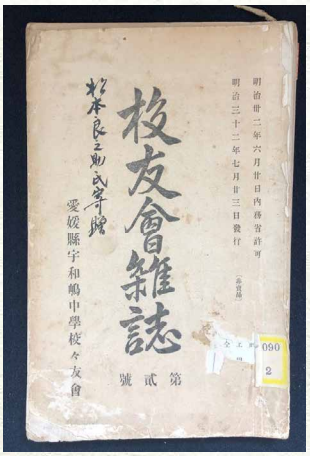
ボートレース大会参加選手。大会時の記念写真と思われる。
U のトレードマークと襟の形状から宇中 7 名が判別できる。
前方右の校旗が松山中、左側が西条中のものと思われる。
宇中は、渡辺文書によれば、尾田校長が作成した豪華絢爛な校旗を強固な反対があり持ち込めなかったとされる。

明治 34(1901) 年 9 月 22 日松山・高浜沖で開催された三校対抗ボートレース大会の出場選手とコーチの宍戸忠士。
U の文字が本校のトレードマークだったようだ。

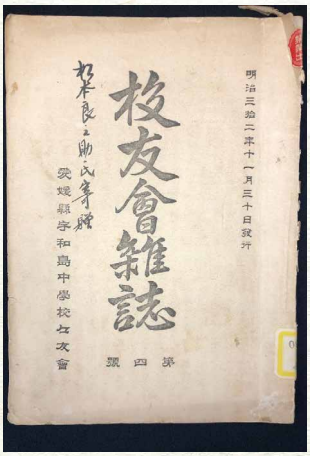
明治 37(1904) 年 5 月の穂積ファミリー
穂積家資料館から
http://www5e.biglobe.ne.jp/~a_omura/hozumi/index.html



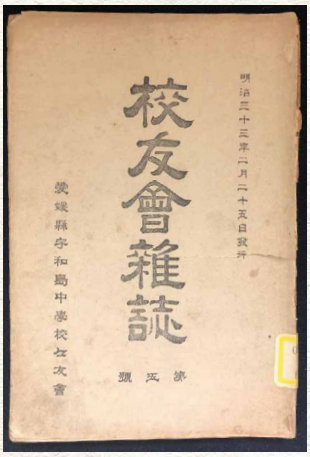
第１号　明治 32 年６月２０日発行



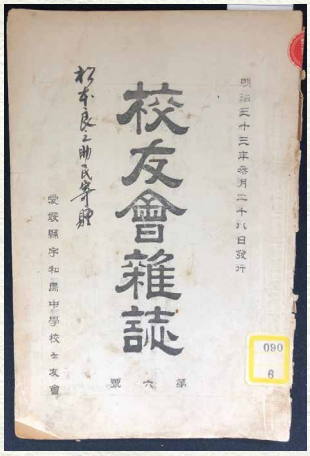
第２号　明治 32 年７月 23 日発行



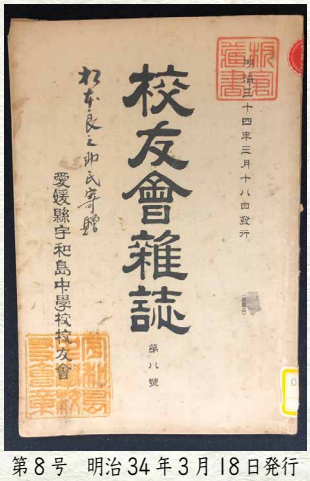
第４号　明治 32 年 11 月 30 日発行



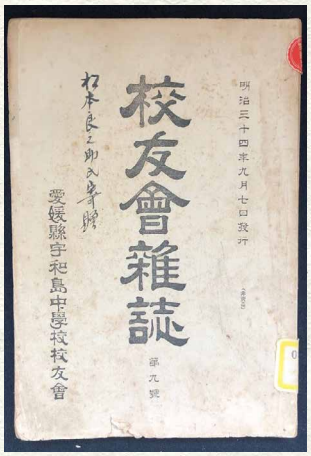
第５号　明治 33 年２月 25 日発行



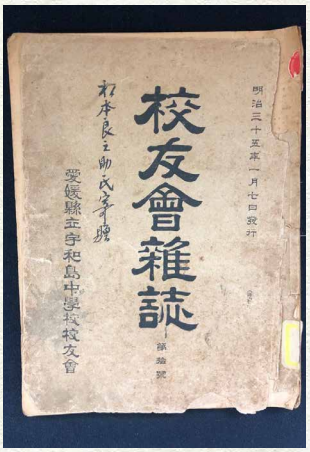
第６号　明治 33 年３月 28 日発行



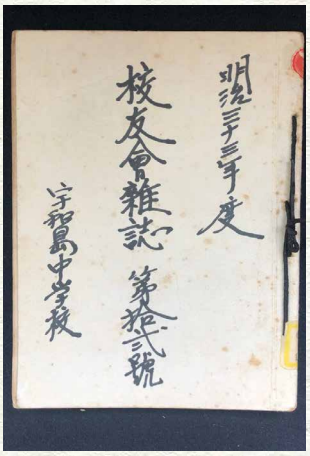
第８号　明治 34 年３月 18 日発行



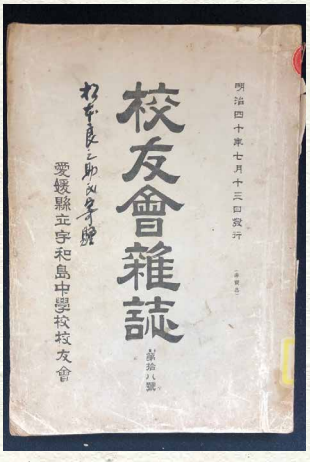
第９号　明治 34 年９月７日発行



第 10 号　明治 35 年１月７日発行



第 12 号　表紙の「明治３３年度」との記載は、後に整理した際に誤って記載したと思われる。



第 18 号　明治 40 年７月 13 日発行

明治期の校友会雑誌で本校に残されているものは、この 10 冊である。
多くが松本良之助氏（宇中１期）の寄贈とされる。
これらの資料を以下で本論読者に限定公開します。
https://drive.google.com/drive/folders/1Rl_0EFVn56qgEK2TEd2HyuDgin73WCPG?usp=sharing

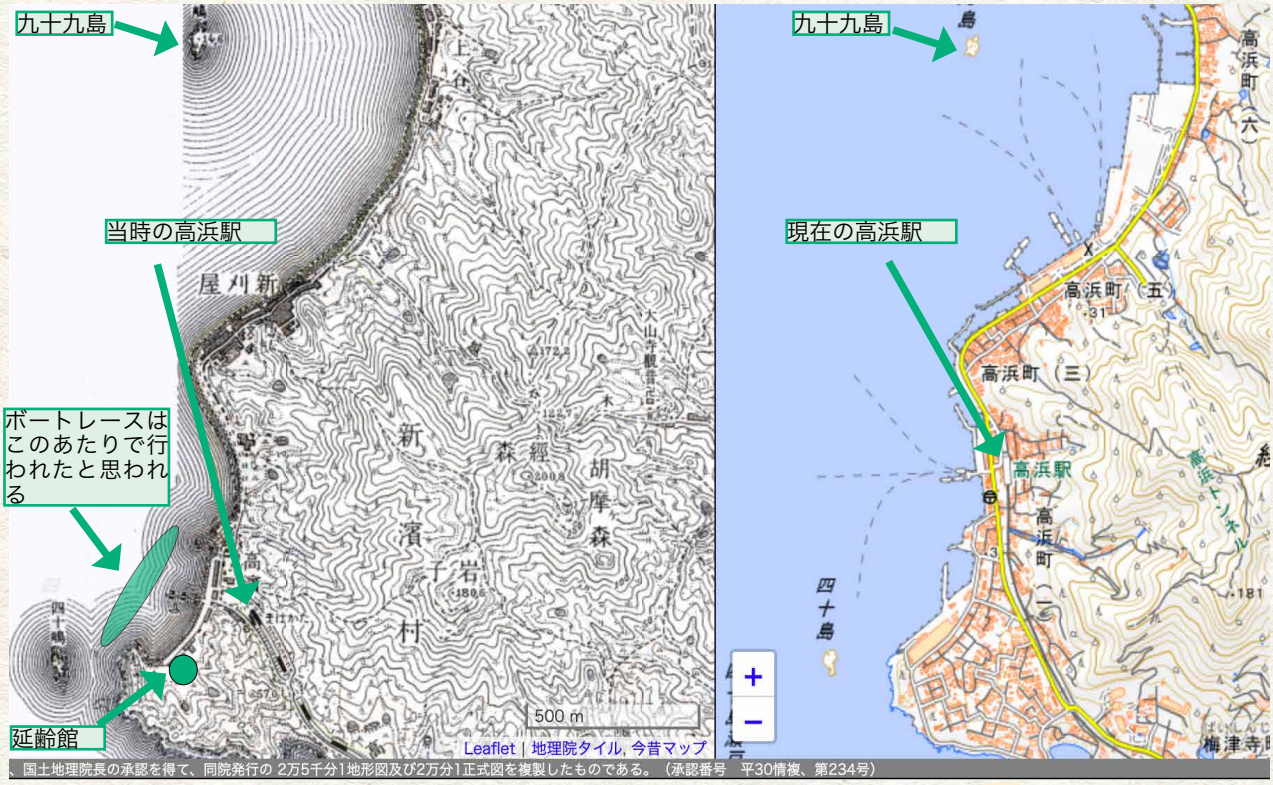
１２０年前　ボートレース大会はここで行われた！

ボートレースが行われたのは、大会前日の海南新聞によると「桟橋を以て審判場となし（中略）桟橋前を以て発漕点となし延齢館下を以て回航点となし其往復一回を競漕距離となすその長さ 1600 メートル凡そ 5 分余を以て漕ぎ得る処なり」としている。

（レース長は 1,600m としているが、渡辺文書他では 800m としている。正確なレース長は、不明である。現在の高浜駅は、明治 38 年に高浜港整備に伴い埋立地に移転しており、当時の高浜駅は、現在の位置から 500m 程松山側にあった。

伊予鉄電（伊予鉄道）の社長であった井上要の『伊予鉄電思ひ出はなし』（伊予鉄電社友會刊 1932 年）が詳しい。

埋立工事には、井上が秋山中将に直談判し、ロシア人捕虜を使役したことなども記載されている。）



1903 年大日本帝国陸地測量部地形図　　1999 年国土地理院地形図

この地図は、時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」（(C) 谷　謙二）により作成したものです。
http://ktgis.net/kjmapw/

豫記の如く一昨廿二日高濱に於て本縣三中學校生徒の短艇競漕會を催す北風吹き添ひ何れも快晴にして外出には頗る適したり伊豫鐵道會社は午前八時より臨時汽車を發し參觀者は毎車滿載して高濱に運ばれたるが少くも五千の人はありしならん本部知事はじめ高等官等も見受けられたり高濱に下りて其景況を見るに桟橋を以て審判場となし愛媛音樂隊亦全桟橋に設けらる桟橋頭を以て發漕點となし延齢館下を以て回航點となし其往復一回を競漕距離となす其長さ壹千六百メートル凡ろ五分餘を以て漕ぎ得る處なり延齢館下濱邊に煙火打揚所あり審判場に於て勝敗を合圖するに從ひ勝者の色（紅勝せば紅幡青勝ては青幡）を現はしたる幡を打揚ぐる樣準備さる又た併設倶樂部を來賓休憩所に充て茶菓の用意

大会前日の海南新聞（明治 34 年 9 月 22 日）

渡辺文書でのコース位置

「コースは現在の駅前桟橋から少し東北よりの海上を起点として、西南九十九島の方向へ海岸に平行して約 400 メートル、そこで回航して折り返し、再び起点に向かって約 400 メートル、往復約 800 メートルであった」としているが、位置は誤っていると思われる。

ボートレース会場は、名勝地だった

ボートレースが行われたのは、風景明媚な名勝地だった。「坊っちゃん」のターナー島を眺めつつ、現在のような護岸でなく、きれいな海岸が続いていた。5,000 名を超える観客は、総立ちとなってボートレースを観戦したことであろう。

雪の間に小富士の風の薫りけり　延齢館にて

子規

「明治 25 年（1892）7 月 15 日－この日、子規は碧梧桐・虚子とともに高浜の延齢館に赴き、その一室「雪の間」で競吟（せりぎん）をおこなった。子規の「雪の間に小富士の風の薫りけり」（前書「高浜延齢館ニテ」）という句はこの日のことを詠んだものであろう（同日の競吟の句会稿には記載がないから後日回想して詠まれたか）」
「伊予歴史文化探訪」
（http://yomodado.blog46.fc2.com/blog-entry-1669.html より）

高浜港の景観　埋立移転後の 1916 年頃と思われる。
「泰弘さんの【追憶の記】です」
（http://y294ma.livedoor.blog/archives/17966273.html より）

延齢館と四十島（高浜港前の子規の句碑の横にこの写真がある。）
「三津ヶ浜のげんたろう　（その２）」
（http://blog.livedoor.jp/gentarou8-genta2/archives/49237301.html より）

今も続く　校内ボートレース大会

現在は、赤松海岸に場所を移し、校内ボートレース大会を開催している。2018/2020 の両年は中止となった。

ボートレースは、このように行なわれたのであろうか。
「坂の上の雲ミュージアム　地図からたどる松山の風景（明治・大正）」
https://www.sakanouenokumomuseum.jp/sp/gis/photo/082.html より）

毎年の体育祭の最後を飾るのは、集団演技「思へば過ぎし」である。

名艇朱雀を偲ぶ

本艇はかって白虎・青龍と共にわが校の新艇と称され、当市堀田造船所の名作とも言われた。惜しくも昭和二十年七月、アメリカの空爆により築地の艇庫ですべて消失した。ボート部の伝統を受け継いで幾多の先輩たちが夕陽の宇和島湾に力漕を重ねたその頃の一景、選手であった一人としてこの絵を創作し、後輩諸兄の奮闘を祈って母校に捧げる。

昭和六十一年　宇中第 37 回卒業生　村田　英鳳

論考　応援歌「思へば過ぎし」の成立をめぐって
― 元譜は大捷軍歌「海城の逆撃」である ―

令和３年１月15日　発行

調査者・著者　　愛媛県立宇和島東高等学校　事務長　藤原　二朗

印刷所　　プリントパック　京都府向日市森本町野田 3-1

発行所　　愛媛県立宇和島東高等学校
愛媛県宇和島市文京町１番１号

U